向木見系特殊器台の研究

A Study on the Special Pedestal of the Mukogimi Series of Ancient Kibi Region in the Late Yayoi Period

春成秀爾

HARUNARI Hideji

❶序　説
❷向木見系特殊器台の諸型式
❸矢藤治山系特殊器台の諸型式
❹後期特殊器台の意義

【論文要旨】

吉備地方の弥生後期後半に発達した特殊器台形土器は，初期，前期，中期，後期に大別できる。そのうち，中期は西山式と上原式の西山系だけであるが，後期は宮山系，向木見系，矢藤治山系の３系列に分岐している。

向木見系は矢部南向式，西江２式，西江３式，向木見式の順に変遷する。特殊器台は，同一型式が地域をこえて出土しているが，胎土分析の結果によると，特定の地域で製作した製品が移動したのではなく，特定の地域に住む人が移動して製作したと考えるほかない。

向木見系最古の矢部南向式と矢藤治山系の矢藤治山式は，足守川地域でのみ見つかっている。矢藤治山系は，向木見式の器形に西山系の上原式の文様を施しているので，向木見式の後に成立したものである。向木見系と矢藤治山系の２系列は足守川地域で生成したのであろう。その一方，宮山系の柳坪式と宮山式は総社東部地域からのみ出土しているので，宮山系はこの地域で生成したのであろう。そして，都月系円筒埴輪の最古型式は足守川地域で見つかっているだけでなく，矢藤治山式特殊器台からの変換を型式学的に説明できるので，円筒埴輪はこの地域で生成したと考える。

特殊器台前期には楯築，同中期には鯉喰神社の大型墳丘墓がともに足守川地域に存在する。しかし，２系列に分岐した同後期には，大型墳丘墓の築造は止み，その最後に足守川地域に矢藤治山墳丘墓，総社東部地域に宮山墳丘墓が築かれている。特殊器台を祭祀的統合の象徴的器物として使っていた備中の勢力は，向木見系と宮山系が成立する前に，東と西に分裂したのであろう。

その後，宮山系特殊器台の最終型式，都月系円筒埴輪の初期型式が大和の箸墓古墳や西殿塚など超大型前方後円墳にたててあった事実は，吉備勢力の象徴とそれを祀る人を取り込んで前方後円墳が成立したことをつよく示唆している。

【キーワード】弥生時代後期，備中，特殊器台，向木見系，宮山系，矢藤治山系

❶……序　説

向木見系特殊器台の名祖遺跡である岡山県児島郡郷内村（現・倉敷市木見）向木見（むこうぎみ）遺跡は，1947年12月，当時，木見中学校生徒であった高橋護によって発見された。その後，明治大学学生になった高橋は，1960年5月，「児島市向木見遺跡発見の二・三の遺物」の題で『考古学手帖』第12号に2頁に満たない報告を載せた（図1）［高橋1960］。その中で取りあげられた弥生時代後期の「特殊な箆描文」の「S字状連続文様」を施した「特に大形と考えられる器台」の小破片こそ，学界に初めて報告された吉備地方の特殊な器台形土器であった[(1)]（これが後の「向木見型特殊器台」である）。

1　特殊器台から「埴輪の起源」へ

1952年4月，当時，岡山大学医学部助手であった近藤義郎は，吉備郡新本村（現・総社市新本）立坂（たてさか）遺跡で総社高校生徒が収集していた特殊な文様をもつ弥生後期の土器片の寄贈をうけていた（これが後の「立坂型特殊器台」である）。久米郡柵原町（現・美咲町柵原）月の輪古墳の発掘報告書をまとめつつあった近藤は，埴輪についてもつよい関心をもち，1958年に「吉備国における埴輪の変遷」を発表した［近藤1958］。同じ年に，近藤は，岡山市津島の丘陵上に所在する都月坂（とつきざか）の古墳でヘラ描き文をもつ円筒埴輪片を採集したと石井中学校教諭の水内昌康から教えられて，12月に都月坂1号墳の発掘調査を水内とおこなった。全長約33mの前方後方墳の後方部で竪穴式石槨を発掘，さらに後方部の東側と南側の裾から「表面に線刻が画かれている」円筒埴輪を得ることができた［水内1959］（これが後の「都月型円筒埴輪」である）。しかし，比較すべき資料がなく，古墳前期の特異な埴輪という以上の位置づけはできなかった。

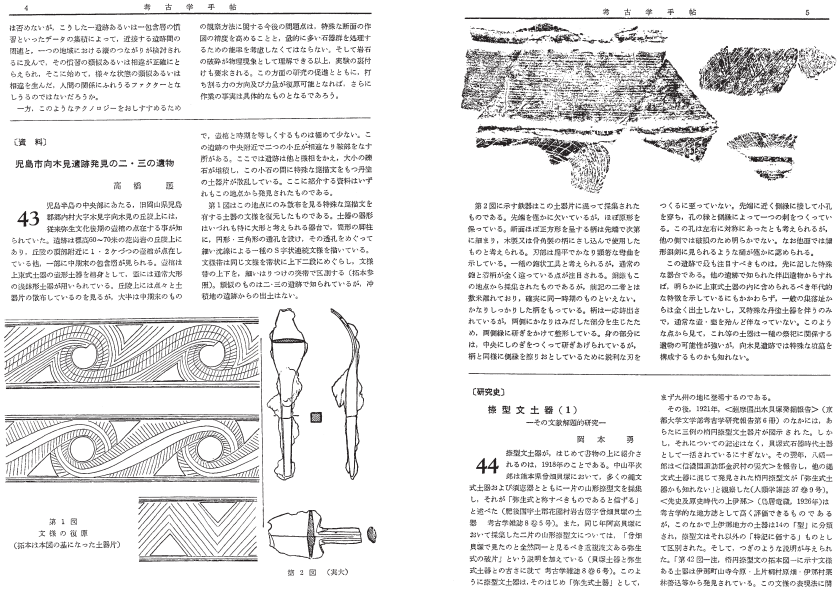


図1　特殊器台の最初の報告［高橋1960］
『考古学手帖』第12号の4頁の途中から始まり5頁の途中で終わっている。
同誌は，明治大学の考古学専攻の学生たちが発行する同人誌であった。

1961年，総社市三輪の丘陵上を踏査していた高橋護は，宮山で向木見遺跡の出土品に類似する特殊な器台の破片を採集した。その後，岡山県総合文化センター学芸員になった高橋は，同センターに篤志家から研究支援の寄付金があった機会に，宮山遺跡の発掘調査を企画した。調査は，1963年8月に高橋を現場主任として岡山県の研究者の多くが参加する宮山遺跡発掘調査団によって実施された。その結果，短い突出部をもつ全長38mの前方後円形墳丘墓の円丘部で竪穴式石槨を発掘，副葬品の飛禽鏡・鉄剣・鉄鏃を見いだした。そして，墳丘裾と周辺の墓からは弥生後期末の特別に大型で特殊な形態と文様をもつ器台形土器を見つけた（これが後の「宮山型特殊器台」である）。さらに，その器台とセットになる特殊な壺形土器の存在も明らかになった。「特殊な器台」は，調査中の夜の検討会でしだいに「特殊器台」と呼び慣らわされるようになり，特殊器台と吉備地方における弥生後期の墳丘墓から初期古墳の出現の問題は，急激に関心が高まった［高橋1963，K 1963］。

岡山大学法文学部講師になっていた近藤義郎はその機会をとらえ，岡山市都月坂1号墳の第2-3次発掘調査を1964年12月～65年3月の間に実施した。「特殊な」円筒埴輪と壺形埴輪はさらに追加され，それらは後方部東裾，前方部北くびれ部で残りが特によかったが，小破片は後方部の全周から見つかり，本来は墳丘の全周囲をめぐっていたと推定された。1965年7月～66年1月の間には，隣接する都月坂2号墳丘墓の発掘調査を行い，吉備地方をフィールドにして古墳出現前夜の状況の追究をつづけた［近藤1966］。当時，岡山大学法文学部学生であった私は都月坂の調査の全期間参加し，終了後は出土品の整理にあたった。こうして，円筒埴輪と壺形埴輪の実体がしだいにわかってきた。

都月坂1号墳の円筒埴輪を最古型式の埴輪と認識することによって，特殊器台・特殊壺から円筒埴輪・壺形埴輪への変遷の概略をつかんだと考えた近藤と岡山大学法文学部助手になった私は，1966年秋に「埴輪の起源」を同年12月に『考古学研究』（第13巻第3号）に発表する予定で執筆を進めた。しかし，その号の発行が遅れ，発表は翌1967年2月になった。この論文では，それぞれ初見の遺跡名を尊重して特殊器台の立坂型，向木見型，宮山型，最古円筒埴輪の都月型を設定し，円筒埴輪は特殊器台を母体にして吉備地方で生成し，のちに近畿地方の古墳に採用されたことを論じた［近藤・春成1967］。

2 「埴輪の起源」その後

当時，円筒埴輪の起源についての最有力であった考えは，奈良県桜井市外山（とび）茶臼山古墳の墳頂部を方形に取り囲んでいた底抜けの壺形土器を，埴輪の祖型とみなす末永雅雄の説［末永1951：8］，そしてそれを継承した上田舒（のぼる）（宏範）の説であった。すなわち，朝顔形円筒埴輪を媒介にして，「円筒は埋めたてるさいの器の安定をはかるに必要な台で，壺の下部が変形されたものである」とする考えである［上田1959：158-159］。しかし，壺の下部を変形すれば円筒埴輪が生まれるものであろうか。物的証拠ではなく，理念にもとづいて円筒埴輪の起源を説明することには無理があり，大方を納得させるには至っていなかった。

私たちの問題提起に対して，当時，古墳研究の第一人者であった小林行雄は，「円筒埴輪の発生地を吉備地方に求めることによって，はたして他の現象の解釈に矛盾をきたすことはないか。その

検討には，また多くの時間を必要とするであろう」と評した［小林1971：85］。また，小林は，宮山遺跡の特殊器台を「器台形の円筒」と呼び4世紀に位置づけ，「器台形の土製品は，畿内では，ふつうの円筒埴輪とおなじ古墳に共存する実例があるから，むしろ，埴輪の一種としてとりあつかうべきものであろう」とも述べた［小林1974：123-124］。しかし，具体的な古墳名とその土製品を示したうえでの意見ではなかったために，問題にはならなかった。小林は，三重県上野市石山古墳の発掘調査で円筒埴輪の配列状態を確認し，その配列は墓域および祭壇を区画する機能をもっていたことを考えていた［小林1959：163-166］。しかし，単体としての円筒埴輪が何物であるのかの代案はもっていなかった。

こうして，円筒埴輪の起源を壺形土器に求める実証性を欠いた説は霧消し，特殊器台という具体的な資料を提示した円筒埴輪の吉備起源説は，さしたる反対意見が提出されることもなく学界で受け入れられていった。

その前後に，岡山大学考古学研究室では，1966年8月に総社市伊与部山（いよべやま）墳丘墓［近藤編1996］，1966年12月と67年7月に津山市上原遺跡［近藤1986］，1971年10月～72年9月に総社市立坂墳丘墓［近藤編1996］，さらには，1966年3月に兵庫県新宮町（現・たつの市）吉島（よしま）古墳，1967年3月～68年8月に揖保川町（現・たつの市）養久山（やくやま）古墳・墳丘墓群，1967年12月～68年4月に岡山市湯迫（ゆば）車塚古墳，1971年5～6月に京都府山城町（現・木津川市）椿井（つばい）大塚山古墳などの発掘調査をつぎつぎと実施して，特殊器台と前方後円墳の出現過程を解明するために必要な基礎資料の収集につとめた。

同じ頃，倉敷考古館の間壁忠彦・間壁葭子は，1959年7月に岡山県小田郡矢掛町の丘陵上で採集した「特殊な凸帯を持つ土器」に注目して，1966年2～3月に芋岡山遺跡を発掘［間壁・間壁1967］，それに先立つ1965年5月に都窪郡（現・総社市）清音村鋳物師谷（いぶしだに）2号墳丘墓を調査［小野ほか1977］，その後，1968年3月に井原市笹賀町金敷寺（かなしきでら）裏山墳丘墓を発掘［間壁・間壁1968］，1977年3月に吉備郡（現・倉敷市）真備町黒宮大塚墳丘墓を発掘して［間壁ほか1977］，特殊器台を伴う弥生後期末の埋葬遺跡に関する重要な資料をつぎつぎと報告した。

また，県・町の教育委員会は，1975年12月～76年5月に阿哲郡（現・新見市）哲西町西江遺跡［田仲ほか1977］，1976年4～11月に真庭郡（現・真庭市）落合町中山遺跡［山磨・奥1978］，1977年4～5月に吉備郡（現・倉敷市）真備町西山遺跡［正岡ほか1979］，1976年7月～12月に広島県三次市矢谷（やだに）墳丘墓［金井・小都編1981］など，各地で緊急発掘調査をおこない，重要な資料を公けにした。

さらに，1976～89年の間，近藤義郎を団長とする楯築（たてつき）墳丘墓発掘調査団による7次にわたる倉敷市楯築墳丘墓の発掘調査は，吉備地方の弥生後期の最大規模で重要な内容をもつ墳丘墓の実態を明らかにし［近藤編1992］，来たるべき前方後円墳の成立に関して幾多の問題提起があった［近藤1977・2001］。

その一方，特殊器台や都月型埴輪は，奈良県箸墓古墳や西殿塚古墳などに存在する事実が1960年代の終り頃から報じられ，それらの超大型前方後円墳は近畿地方最古の古墳であり，円筒埴輪は近畿地方の一部の古墳では古墳出現当初から存在することが明らかになっていった［中村・笠野1976，福尾1990，徳田・清喜2000］。吉備地方はもとより他地方でも特殊器台・都月型埴輪の出土例は著しく増加し，それらをめぐっていくつもの論著が公けになった［狐塚1977，宇垣1981，高橋

1986，古市 1996，近藤 2001，宇垣 2013，ほか］。

特殊器台の編年案は，立坂型→向木見型→宮山型→都月型の変遷を承認したうえでの若干の修正意見は提出された。資料の増加もあって細別案の提示もあったが，基本的な枠組みは動かなかった。ここでは研究史の詳細を記述することはしないけれども，資料が少ない段階での，あくまでも大別にすぎなかったが，それゆえにこの編年案は単純明快であったのだろう。

しかし，いま振り返ってみると，立坂型と宮山型との間に向木見型をおくことの正当性は型式学的に証明したことになっておらず，課題としてのこされていた。ここで取りあげる向木見系特殊器台については，哲西町西江遺跡などで良好な資料が出土していたけれども，同一型式内の個体差ていどに理解され，その解析には向かわなかった。倉敷市西山遺跡で出土した特殊器台胴部の完形品（「西山式」）の編年的な位置づけも，あいまいなままに放っておかれた。特殊器台の研究に先鞭をつけた高橋護は，「編年の基本は，土器型式を基礎とした伴出遺物に基づく以外に方法がない」と述べ，特殊器台そのものに「モンテリウスばりの型式学を展開」する編年作業に否定的な見解を表明していた［高橋 1984：1］。近藤義郎は，「埴輪の起源」で提示した編年案に，その後は岡山市矢藤治山（やとうじやま）墳丘墓で発掘した特殊器台を「向木見型の成れの果て」とみて，矢藤治山型を追加したけれども、あとは当初案を祖述することに終始した［近藤 2001：143-147］。

考古学界の弥生／古墳移行期の研究分野に衝撃的な成果をもたらした 1963 年夏の総社市宮山墳丘墓の調査から 54 年，1967 年の論文「埴輪の起源」の発表から 50 年の歳月が流れた。吉備地方内部の動向と近畿地方との関係について論じるには，まず特殊器台の型式変遷の十分な理解がなければならない。しかし，特殊器台の形態，特に文様を重視した分析がないために，特殊器台の型式細分が進まず，この問題の追究を難しくしていると私は考え，先年来，特殊器台の諸「型」を細分し，編年の再構築と援用を試みる作業に取り組んできた。その第一歩として，宮山型特殊器台の前後に位置する諸型式の存在を認めて，宮山型を「宮山系」に改め，そのなかに含まれる諸型式を明らかにするとともに，他の「型」も「系」に改称し諸型式を設定することにした。宮山系特殊器台を検討した結果はすでに発表したので［春成 2017］，今回は向木見系と矢藤治山系の特殊器台の諸型式を記載し，以上の 3 系列間の関係について考察するとともに，特殊器台から都月系埴輪への転形の問題を展望する。

❷……向木見系特殊器台の諸型式

吉備地方の特殊器台すなわち吉備型特殊器台には，いくつかの系列と多数の型式が存在する。そこで，従来の「立坂型，向木見型，宮山型，都月型」をそれぞれ「立坂系，向木見系，宮山系，都月系」と呼び変え，さらに初期：長坂系，黒宮系，前期：楯築・立坂系，中期：西山系，後期：向木見系，宮山系，矢藤治山系と，各系列を構成する諸型式を設定する。そのうち，すでに述べた中期の西山系と後期の宮山系のあとをうけて，この章では，後期の向木見系について取りあげる。

特殊器台・特殊壺は葬儀用にごく少数製作した特別な土器であって，その大多数は墓地遺跡から少数出土するだけで，その数型式が層位的に上下関係をもって出土したことはない。したがって，

特殊器台を型式学的に細分しその変遷を明らかにするには，胴部文様の型式学的特徴を基準にして，それに他の形態的特徴を合わせて設定した諸型式を相互に比較して編年作業を進めるほかない。特殊器台とセットになる特殊壺も，その形態と文様，製作技法上の特徴から型式分類をおこない，同じ遺跡から出土した特殊器台との組み合わせを考慮しながら，編年作業を進める。特殊壺のなかには特殊器台の上に載っていたものが落下して，両者が折り重なるような状態で出土した例を大いに活用したい。

なお，向木見系を型式分類し，その成立，変遷，終焉を明らかにしようとする試みは過去にないので，本論で用いる型式名はすべて私の命名である。特殊器台・壺の部分呼称は，諸氏の意見［狐塚1977，宇垣1981］に従い，文様帯・間帯は下から数えて，第1，第2，……と呼ぶことにする。「弧帯文」の用語は，近藤義郎が倉敷市楯築墳丘墓の石造品（弧帯石）2点を紹介したさいに，「帯を反えし潜らせ巻きつけたような弧状の文様」に対して初めて使ったもので［近藤1980:3, 27］，その後，特殊器台の線刻文様についても「連続S字状文様」の呼称［近藤1992a：246］から「弧帯文」への呼称変更の提唱があり［宇垣1981：67］，「弧帯文」は包括的で簡潔な表現であったことから，以後は多くの人が採用するところとなり，現在にいたっている。「弧帯文」の内容は多様であって，西山系，向木見系，矢藤治山系の「弧帯文」は，定義上は連続渦文（連渦文）であり，都月系の文様は蕨手文である。ここでは，以上の総称として「弧帯文」の呼称を使うことにしたい[(2)]。間帯と口縁帯の「板描き凹線文」とした文様は，1枚の板の末端を横方向に運動させたときに生じた木目の擦痕すなわち「刷毛目」［横山1978］の一種であると推定するが，証明するまでにはいたっていない。線条間の間隔が粗く（4～5条/1cm），「刷毛目」の一般的なイメージには合わないので，ここではこの呼称を用いることにする。

1　向木見系特殊器台諸型式の記載

向木見系特殊器台の主系列を，次のように理解する（図2・3）。便木山式以下の型式については，主系列から分岐し，後続しない型式と考え，それぞれの位置づけを後でおこなう。

（矢藤治山系）矢藤治山式→小阪合式
↗
（西山系）西山式→上原式→**（向木見系）**矢部南向式→西江2式→西江3式→向木見式→
↘　　↘　↘
便木山式　　矢谷1式　矢谷2式

a　矢部南向式

岡山県倉敷市矢部南向遺跡の竪穴住居37上層土器溜り（図2）と土坑72から出土した同一個体の特殊器台1個体［松本・江見1995：792-808，849-871，第171図，岡山県古代吉備文化財センター蔵］にもとづいて設定する型式である（図2，図3-1）。1986～88年に足守川河川改修工事に伴う調査で岡山県教育委員会が発掘。伴出土器は弥生後期末の才の町Ⅰ式で，炭素14年代を参考にすると，2世紀第2～3四半期頃とみてよいだろう。

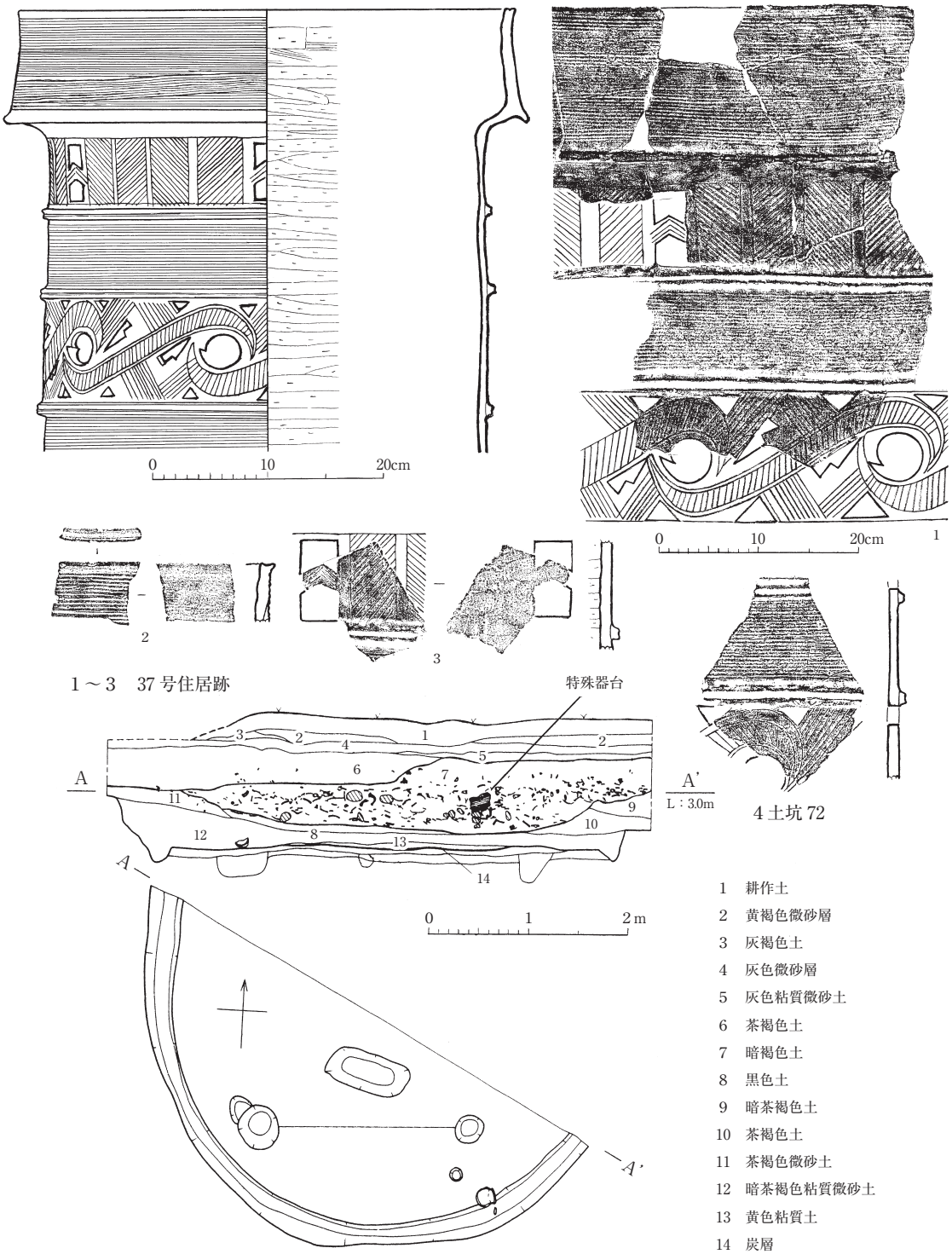


図２　倉敷市矢部南向遺跡の37号住居跡と出土の特殊器台（[松本ほか 1995] から作成，拓本は春成）
住居を放棄した後，竪穴が土でほとんど埋まったあと，のこった浅い凹みに大量の土器破片を投棄していた。矢部南向式特殊器台の破片は，この住居跡と近くの土坑 72 から同一個体が見つかった。

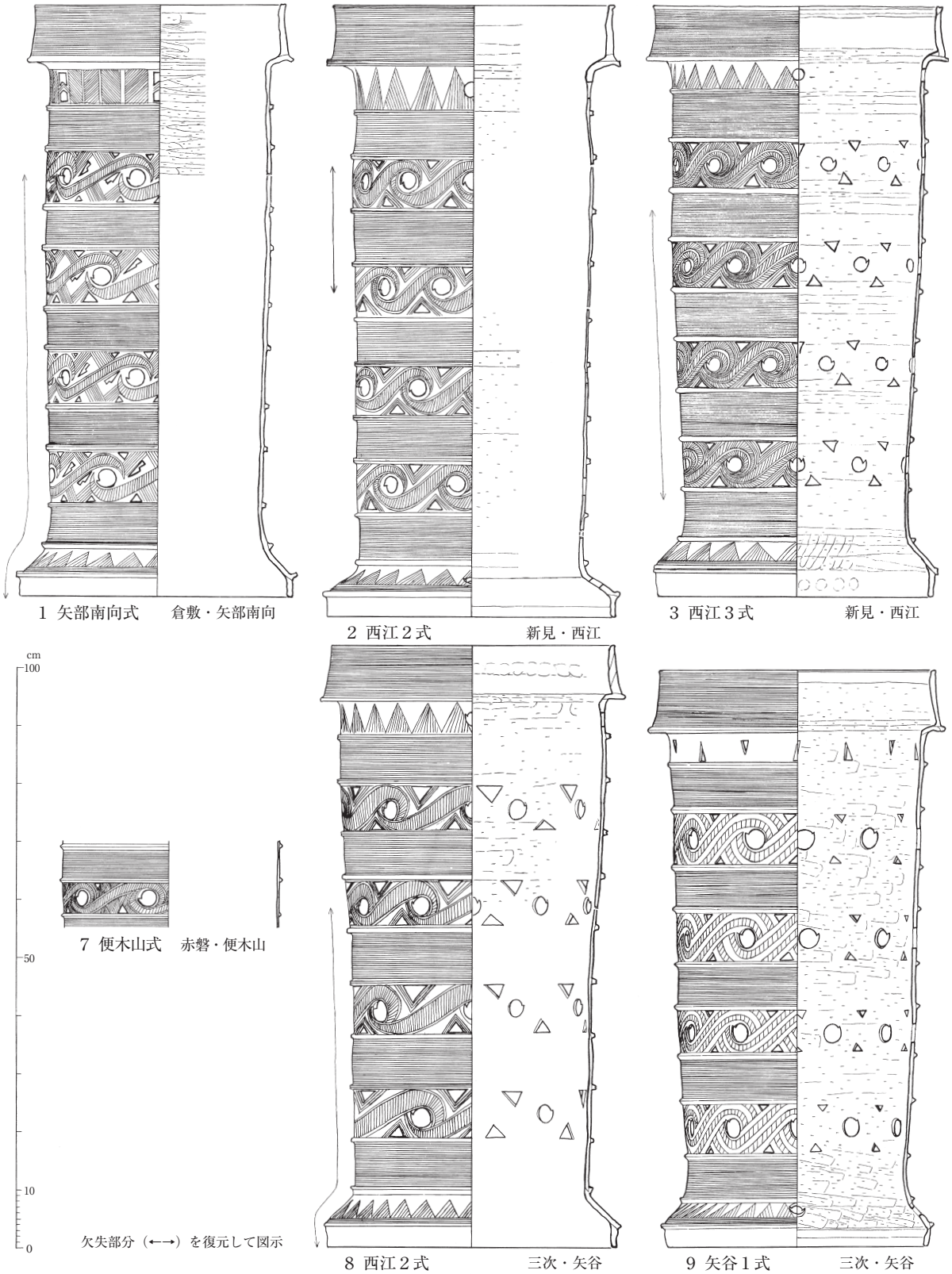
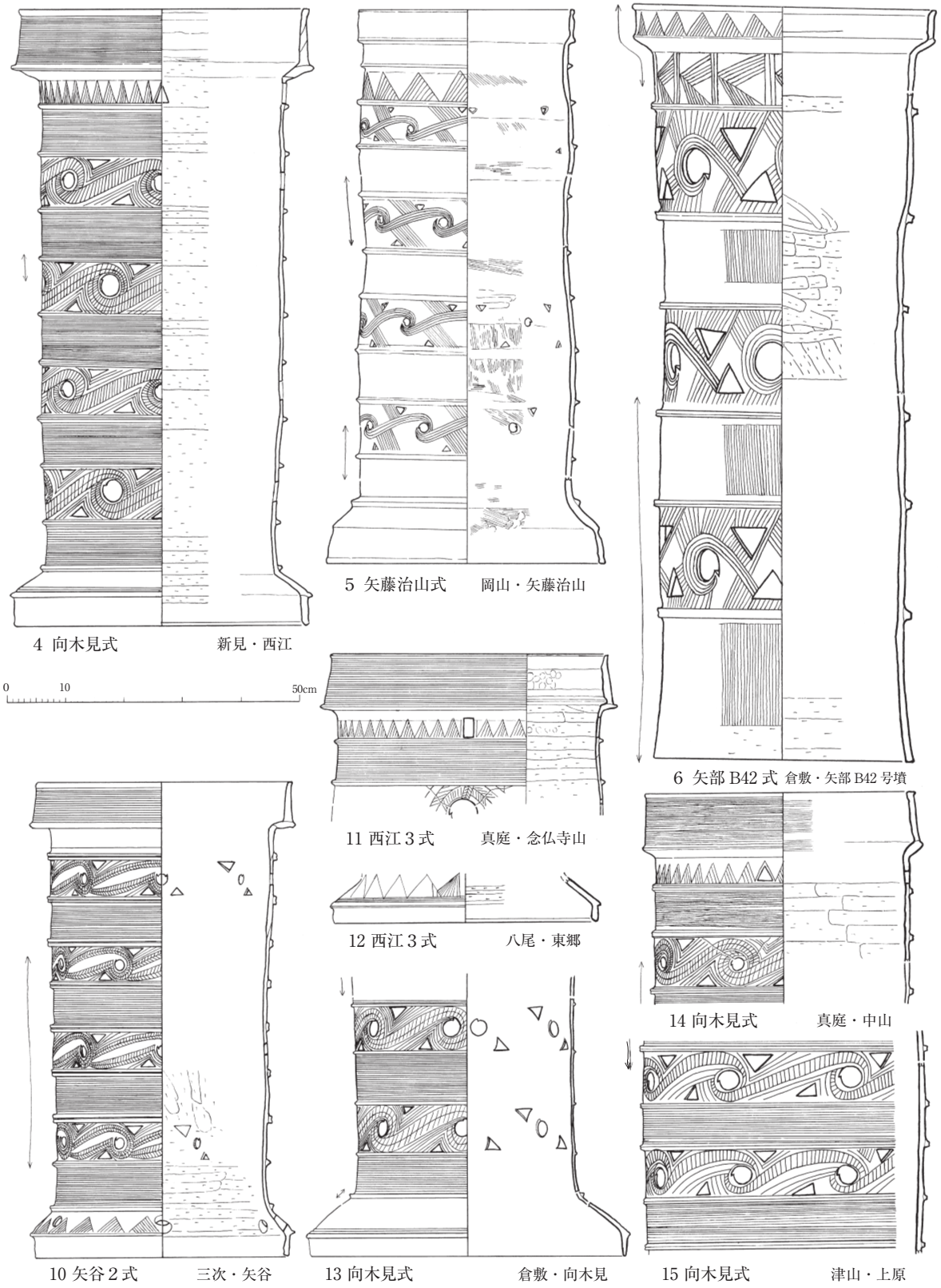


図３　向木見系特殊器台，矢藤治山式特殊器台，円筒埴輪の最古型式


4 向木見式 新見・西江
5 矢藤治山式 岡山・矢藤治山
6 矢部 B42 式 倉敷・矢部 B42 号墳
0 10 50cm
11 西江 3 式 真庭・念仏寺山
12 西江 3 式 八尾・東郷
14 向木見式 真庭・中山
10 矢谷 2 式 三次・矢谷
13 向木見式 倉敷・向木見
15 向木見式 津山・上原

形状・大きさ　口縁部から頸帯，第5間帯，第4文様帯の上半分弱までの高さ25cm，幅15cm大の破片と同一個体の小破片からなる。先行する西山式を参照して，胴部は文様帯4，間帯5と推定する。

口縁部径42.5cm，口縁帯幅（高さ）10.2cm，頸帯幅（高さ）7.4cm，間帯幅（高さ）5.8cm，文様帯復元幅（高さ）8.4cm，第4文様帯の径38.0cm，頸帯径37.5cmで，胴部第4文様帯付近がわずかに胴張りしているのであろう。推定高99.5cm。間帯の幅と文様帯の幅との割合は1：1.44であって，先行する西山式の1：1.3とくらべると，文様帯幅は広い。内面は，口縁端から2cm以下は横方向にヘラ削りしている。丹塗りは施文前で，口縁部内面の2cm下から始まり，おそらく脚部裾の突帯までの範囲である。

胎土は雲母片と角閃石片を含む暗い茶褐色である。先行する西山式とくらべると，重厚な印象を与える作りである。口縁帯（竪穴住居37上層土器溜り出土）の内面，および胴部の間帯（土坑72出土）の内外面にみられる剝離は，田崎博之によると「焼成破裂痕」である［田崎2004：70，Pl.99］。内外面とも風化しておらず，保存状態が良好であるのは，付近のどこかに立てて使っていたのではないことの証拠となる。伴出した他の土器と同様に，焼成失敗で使い物にならず廃棄したのであれば，この特殊器台はこの近所で製作された可能性が高い。

文様　口縁帯は，幅広い付加部がほぼ垂直に立ち，外面には幅約3cmの板で水平方向に板描き凹線文（4条/1cm）をおそらく3段に重ねて口縁帯いっぱいに施している。

頸帯には縦に長い斜線文帯を4単位配列して綾杉文を構成し，長方形の透孔の中央に山形のブリッジを渡した変わった透孔を穿っている。ブリッジには3～4条の山形文を施している。

胴部は，断面が台形・横M字形の突帯によって区分している。文様帯の弧帯文は，連続渦文である。残存している2文様帯のうち，1は2条，2は1条で，一定の間隔をあけて併行する2本で横S字形に描き，そのなかを左下がりの連続斜線で填めている。渦文の1単位の長さは14cm，1周の間に8単位をめぐらせていると推定する。渦文の2つの単位が結合する個所では，渦文の先端は幅がせまくなり尖って，隣と接している。渦文の上に斜線文を逆V字形に配している。斜線の数は7～8条である。渦文の下は残存していないが，斜線文をV字形に配しているのであろう。

透孔は，施文前に穿ち，それに合わせて文様を施しているが，一部は透孔から外れてしまっている。渦文の個所には，おそらく巴形，渦文の左右のほぼ中央に斜線に1辺を沿わせて右上と左下に向かう包丁形の透孔を2つ穿っている。包丁形透孔は斜線文帯の個所では，上に下向きの小さな三角形の透孔を2つ伴っている。下は現存しないが，同様の文様と透孔をもっており，文様1単位に7つの透孔をもっているのであろう。包丁形の透孔は，西山式の鉤つき矢印形の変形であって，直前の上原式の無鉤の矢印からは出てこない。S字形の渦文の上の斜線帯が逆V形であることからも，矢部南向式は上原式ではなく西山式を継承し，上原式と併行するといえるだろう。

間帯は，幅約1.8cmの板状の原体を段違いに水平に3回動かして板描き凹線文を施している。凹線の間隔は4条/1cmである。

胴部の内面は横方向のヘラ削りで薄く仕上げ，口縁部も上端から1.5cm下までヘラ削りが及んでいる。

特殊壺　この型式に伴う特殊壺の正確な形態は不明である。矢部南向式が上原式と西江2式との

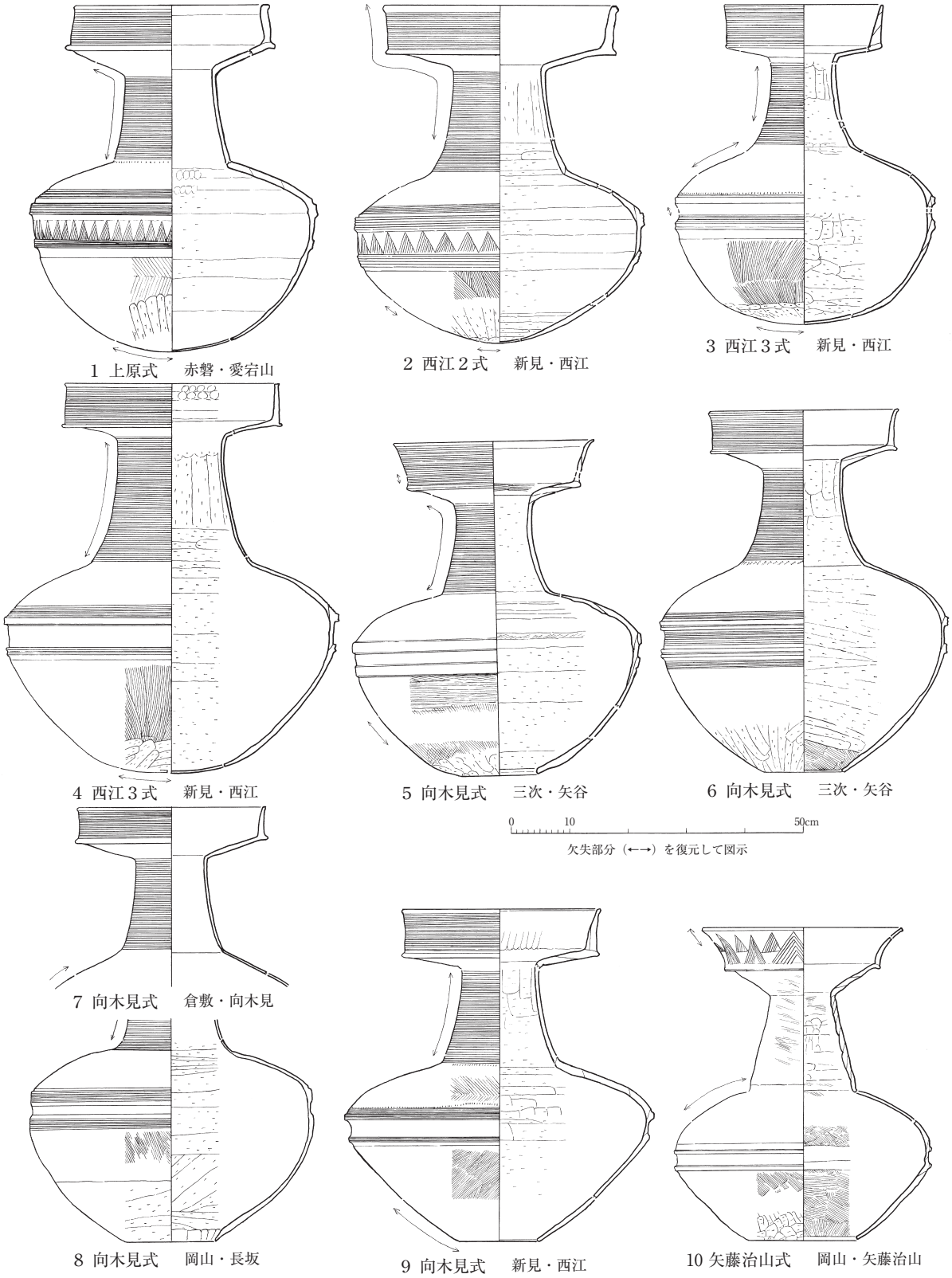


図４　上原式特殊壺(1)**，向木見系特殊壺**(2～9)**，矢藤治山式特殊壺**(10)

間に位置する点から推定すると，新見市西江遺跡および三次市矢谷墳丘墓出土の西江１式の特殊壺と大きく変わるところはないと考える。

すなわち，垂直に立ち上がる幅広い口縁帯，上細・下太の長い頸部，２本の突帯を貼りつけた玉ねぎ形の胴部をもつ壺で，突帯の間に鋸歯文を施しているのであろう。底部はいったん作ったあと，胴部下半から内外面とも著しくヘラ削りして，丸底に仕上げ，底部は使用後に敲打によって穿孔していると推定する。

b　西江２式

岡山県新見市（旧・阿哲郡）哲西町上神代西江遺跡安信地区出土の特殊器台１と特殊壺４［田仲ほか1977：第169図，第175図下，岡山県古代吉備文化財センター蔵］を基準資料にして設定する型式である（図3-2）。1977年，中国縦貫自動車道建設の事前調査で岡山県教育委員会が発掘。弥生後期後葉の132基以上の木棺墓や土坑墓からなる墓地で，方形台状墓２基，円形墳丘墓も含んでいるが，特殊器台４個体を伴う地区の墓には特別な内容をもつ墓はなく，それぞれがどの墓に伴うものであったのかは明示できない（図5）。広島県三次市東酒屋町矢谷墳丘墓の特殊器台５［金井・小都1981：図33-37，広島県立歴史民俗資料館蔵］は，口縁部から第３文様帯までがこの型式で（図3-8），第２間帯から脚部は別個体の向木見式であろう。

形状・大きさ　口縁帯，頸帯，文様帯４，間帯５，脚部と推定する。口縁帯から頸帯，第５間帯，第４文様帯の上1/3までの高さ29cm，幅22.4cm大の破片と脚部から第３文様帯の下1/3までの高さ53cmがのこっている。

口縁部径48.0cm，口縁帯幅11.0cm，頸帯幅7.5cm，間帯幅6.5cm，文様帯幅8.5cm，胴部下端径38.4cm，頸帯の最下径40.2cm，底部径49.8cmで，胴部上半の第４文様帯付近にわずかに胴張りがある。復元総高104cm。間帯の幅と文様帯の幅との割合は1：1.13である。口縁帯から頸帯への移行部はわずかに内側に食い込んでいる。口縁帯下端はしっかりした突帯で沈線２条をいれてm字形にしている。胴部の突帯は10本のうち８本は断面が横M字形ないし台形でしっかりした作りであるが，下の２本は放物線形に近い。突帯は，上端から貼りつけていったとすれば，断面は横M字形があるべき形であって，下端の放物線形は省略形ということになろう。矢谷例は，高さ104cmで，西江例と同高である。丹塗りは，口縁部内面の3.2cm下から脚部裾の突帯までの範囲である。

胎土は雲母片と角閃石片を含む暗い茶褐色である。

文様　胴部文様帯の弧帯文は，多条の連続渦文である。一定の間隔をあけて併行する２条１単位の２本線で横S字形を描き，そのなかを左下がりの連続斜線で填めているが，一部に横S字形と併行する４条の線で填めた変則的な個所がある。渦文の１単位の長さは約11cmと短く，１周の間に11～12単位文様をめぐらせていると推定する。渦文の２つの単位が結合する個所では，渦文の先端は幅せまくなった状態で接している。渦文の上に３～２条からなる斜線帯をV字形に配し，渦文の下に４～５条からなる斜線帯を逆V字形に配し，それぞれで囲まれた個所に合わせて逆三角形と三角形に透孔をあけている。V字形の斜線文は，渦文から独立している。

渦文の個所の透孔は，巴形で右下に尾を向けている。透孔は矢部南向式にあった包丁形がなくなっ

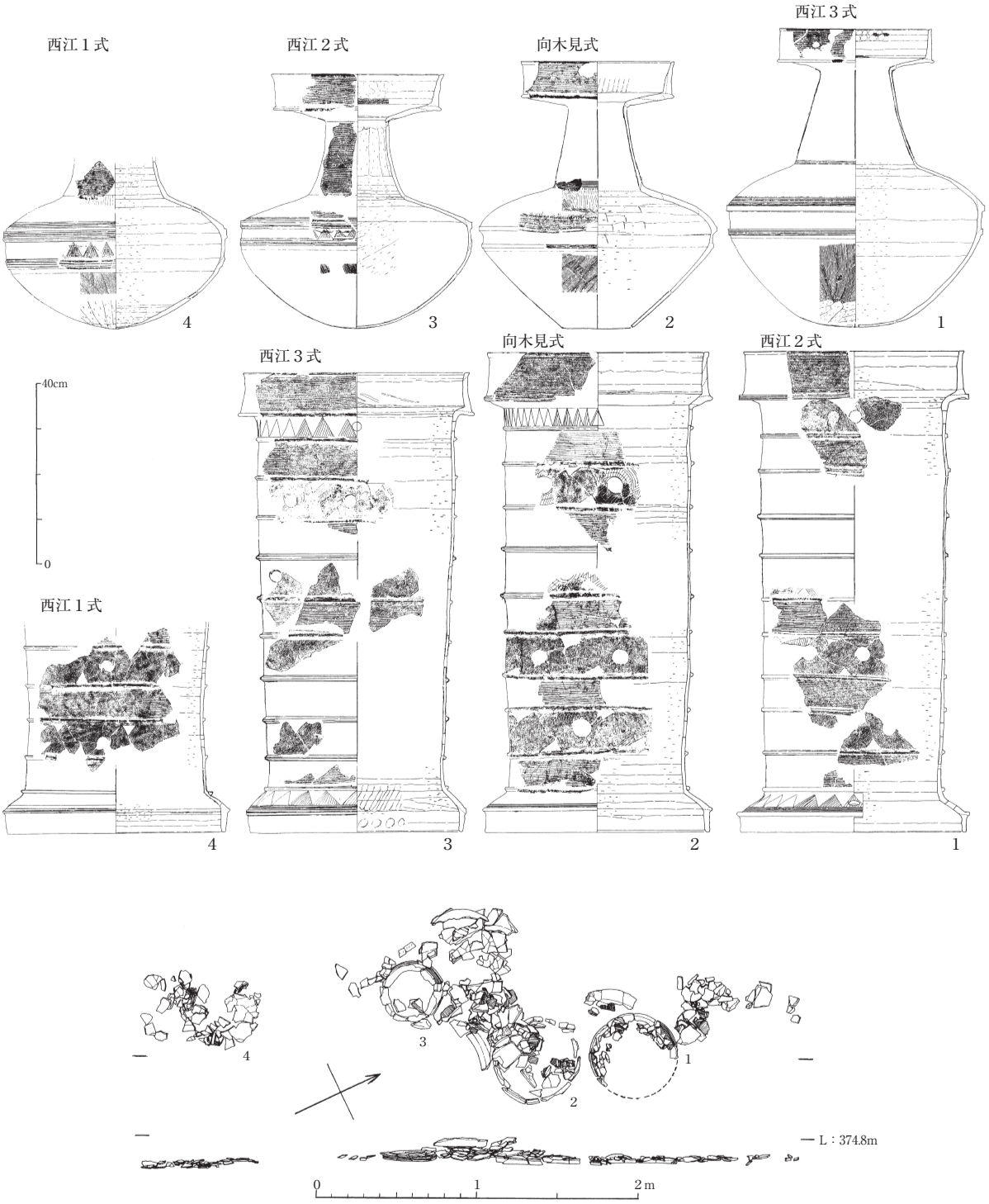


図５　新見市西江遺跡の特殊器台・特殊壺の出土状態と出土品（［田仲ほか 1977］から作成）

特殊器台は，多数の木棺墓からなる墓地の１個所に，４→１→３→２の順に置いたと推定。ただし，特殊壺の型式は，３→４→１→２と考えられるので，１と３・４はどこかで入れ替わっている可能性がある。西江１式は宮山系，西江２式～向木見式は向木見系であるので，西江では特殊器台の系列が宮山系から向木見系へ移っていることになる。特殊器台を供えられた被葬者の系譜に変化があったのであろう。木棺墓の規模に格差はなく，特殊器台を伴う葬儀がどの埋葬の時におこなわれたかは不明である。特殊器台は，文様帯が４段として全形を示した。

たので，1単位文様につき3つに減じている。

頸帯には縦にやや長い上向きの鋸歯文をめぐらせ，推定4個所に円形の透孔（径約2.5cm）をあけている。

間帯は，板状の原体を水平に動かした凹線文（4条/1cm）を施している。

胴部の内面は，横方向のヘラ削りで薄く仕上げている。

口縁帯は，幅広い付加部がほぼ垂直に立ち，外面には水平方向に板描き凹線文（4条/1cm）を幅広く施している。内面は口縁端から3.2cm下までヘラ削りが及んでいる。脚部も台の下端から2.0cmのところまでヘラ削りしており，内面のヘラ削りの範囲は広い。

特殊壺　この型式に伴うのは西江遺跡の特殊壺4と考える［同前：第175図下］。

西江例は，算盤珠形の胴部で側面に2本の突帯を貼りつけ，下胴部は底部が近くなったところで急にすぼまっており，丸底風になる。突帯は上下とも幅2.0cmで低く，側面に上は4条，下は3条の板描き凹線文をめぐらせている。2本の突帯間は上向きの鋸歯文を施している。鋸歯文は，ほぼ正三角形，鋸歯内は左下がりの斜線でうめている。胴部の下半は繊細なハケ目調整のあと底部近くだけは，異常にヘラ削りして薄い丸底状に仕上げている。焼成後に底部の中央に径3.5cmの孔をあけている。推定すれば，径5cmほどの平底風にいったん作ったあと，器表を削りながら丸くして，底部に穿孔するのに便利なように薄くしているのであろう。ヘラ削りは，外面は縦方向（放射状），内面は横方向である。西江例は推定高57cm，胴部径（上突帯の位置）50cmを測る。

c　西江３式

岡山県新見市哲西町西江遺跡出土の特殊器台3と特殊壺1［田仲ほか1977：第171図，第174図上，岡山県古代吉備文化財センター蔵］を資料にして設定する型式である（図3-3）。1977年，中国縦貫自動車道建設の事前調査で岡山県教育委員会が発掘。真庭市新庄町念仏寺山遺跡出土の口縁部から第4文様帯の上端までの破片［宇垣ほか1992：501］（図3-11）の文様は変則的であるけれども，この型式にいれておく。岡山市津島遺跡（河道1）出土の胴部の小片3点［島崎ほか編2003：第268図］は，この型式に含めることも，津島式と称することも可能である。文様構成は西江3式よりも綾杉文帯を1本ふやし，新しい傾向をもっている（図10）。大阪府八尾市東郷遺跡出土の脚台部小片［奥編1989：22］（図3-12）は，この型式であろう。

形状・大きさ　口縁帯，頸帯，文様帯4，間帯5，脚部と推定する。口縁端から頸帯，第5間帯，第4文様帯，第4間帯の一部までの高さ36cmの間の破片の一部と脚部から第1間帯の一部までの破片からなる。胴部の突帯は，断面が放物線形で厚い。器壁の厚さは5～7mmで薄いが，重厚な作りである。

口縁部径51.3cm，口縁帯幅9.2cm，頸帯幅5.2cm，第5間帯幅7.5cm，第4文様帯幅7.7cm，胴径は頸帯最下で44.4cm，下端40cmで，上に向かって太くなる。復元総高100cm。間帯の幅と文様帯の幅との割合は1：1.02である。口縁帯から頸帯への移行部の外面はわずかに内側に食い込む。口縁帯下端の断面は，放物線形の突帯である。胴部の突帯も幅広い放物線形である。器壁の厚さは57mmで薄いが，重厚な作りである。丹塗りは施文前で，口縁部内面の2.0cm下から脚部内面の2.0cm上まで及んでいるが，これは例外とみてよいだろう。

胎土は雲母片と角閃石片を含む暗い茶褐色である。

文様　文様帯の弧帯文は，連続渦文である。一定の間隔をあけて併行する２条で１単位とする２単位で一定の間隔をあけて横Ｓ字形を描き，そのなかを左下がりと右下がりの連続斜線で填めて，綾杉文風にしている。渦文の１単位の長さは12.3cmと短く，１周の間に10～11単位文様をめぐらせている。渦文の２つの単位が結合する個所では，渦文の先端は幅せまくなり尖ったようになった状態で接している。渦文の上に２条からなる斜線帯を渦文側は曲線に変え反対側は弧線に沿わせてｒ字形に配し，渦文の下は２条からなる斜線帯を逆ｒ字形に配し，それぞれで囲まれた個所に合わせて２辺がｒ形と逆ｒ形の三角形の透孔をあけている。ｒ形の斜線帯は，渦文を縁どるようになり，矢部南向式まであったＮ字形文あるいは人字形文の面影はない。津島遺跡出土の１点はこの型式，のこり２点の文様は，綾杉文帯の上下に斜線文帯を加えて横Ｓ字形を描いており新しい様相をもつが，これらの３点は同一個体の可能性があろう。

渦文の個所の透孔は，巴形で左上に尾を向けている。透孔は，矢部南向式にあった包丁形がなくなったので，１単位文様につき３つに減じている。

頸帯には縦に正三角形の鋸歯文帯をめぐらせ，推定４個所に円形の透孔をあけている。念仏寺山例では透孔は縦長方形である。

間帯は，板描き凹線文（４条/1cm）を施している。

胴部の内面は，横方向のヘラ削りで薄く仕上げている。

口縁帯は，幅広い付加部がほぼ垂直に立ち，外面には水平方向に板描き凹線文（４条/1cm）を幅広く施している。

脚部の裾には４条の板描き凹線文を施している。

内面調整は，口縁端から7.6cm下の屈折部から下をヘラ削りして，それは脚部の台の下端から5cm上のところまで及んでおり，内面のヘラ削りの範囲が少し狭まっている。その傾向は特に口縁帯内面において著しい。

丹塗りは，口縁部から脚部の裾と台の境の突帯の側面までで，台まで及んでいない。

特殊壺　西江遺跡でこの型式の個体に伴ったのは特殊壺３［田仲ほか1977：第175図上］（図5-3）という。しかし，この個体は型式学的には，西江１式特殊器台とセットになるとみたほうがよいと私は判断し，西江３式は特殊壺１［同前：第174図上］（図4-4）であると考える。長頸で玉ねぎ形の胴部は肩が丸く，側面に２本の突帯を貼りつけ，下胴部は丸味をもち，底部に近くなると屈折部なしに急に平たくなって丸味をもったまま終わっている。上突帯の上方には板描き凹線文をめぐらせる。突帯の幅は1.5cmで低く，上突帯の側面は無文，下突帯の側面は２条の板描き凹線文をめぐらせ，突帯間は無文である。底部は，内外面ともヘラ削りして著しく薄くしており，厚さは5mmにすぎない。ヘラ削りは，外面は縦方向，内面は横方向である。焼成後というよりも使用後に径約9.5cmの大きな孔を中心から少し外れた位置にきれいにあけている。推定高68cm，口縁部径34.0cm，胴部径57.8cmを測る。

矢谷墳丘墓の特殊壺１［金井・小都1981：図31-29，広島県立歴史民俗資料館蔵］も，この型式である。胴部上半の裾には，小さな円形の刺突文をめぐらせている。胴部下半は縦ハケ後に底部付近は横方向に著しくヘラ削りして厚さ6mmの丸底に仕上げている。使用後に底部中央に孔を径16cmの大

きな孔をあけている。推定高54cm，口縁部径27.2cm，胴部径44.4cmを測る。

d　向木見式

倉敷市（旧・児島市）木見向木見遺跡で高橋護が採集した破片［高橋1960：第1図上，高橋蔵］（図3-13，図4-7）にもとづいて設定する型式である。ただし，小破片であるので，新見市哲西町西江遺跡出土の特殊器台2と特殊壺2［田仲ほか1977：第170図，第174図下，367-368・370・374，岡山県古代吉備文化財センター蔵］（図3-4，図4-9）を基準資料として用いる。真庭市（旧・真庭郡落合町）中山遺跡A区出土の特殊器台4［奥ほか1978：第58図，真庭市教育委員会蔵］（図3-14），津山市上横野上原遺跡出土の2個体（図3-15），および広島県三次市矢谷四隅突出墳丘墓出土の特殊器台5の下半部［金井・小都編1981：Fig.33の37，広島県立歴史民俗資料館蔵］（図7-10）も，この型式に含まれる。

形状・大きさ　口縁帯，頸帯，文様帯4，間帯5，脚部と推定する。なお，西江遺跡の特殊器台2（図3-4）は，文様帯・間帯をそれぞれ1単位少なくして完全に復元されている。口縁部径48.5cm，口縁帯幅10.7cm，頸帯幅4.0cm，間帯幅5.8cm，第1文様帯幅8.5cm，第2文様帯幅8.5cm，第3文様帯幅8.5cm，第1間帯幅7.0cm，第2間帯幅6.5cm，第3間帯幅7.2cm，第4間帯幅7.0cm，胴部の下端最小径39.5cm，上端径41.0cm，上に向かってわずかに太くなっている。脚部径49.6cm。推定総高103.5cm。間帯の幅と文様帯の幅との割合は1：1.21である。口縁帯下端の断面は，放物線形の突帯である。胴部の突帯も放物線形である。口縁端の内端が磨滅しているのは，上に載せた特殊壺を左右に少し回転させたからであろう。丹塗りは施文前で，口縁部内面の4.5cm下から脚部裾の突帯までの範囲である。

胎土は雲母片と角閃石片を含む暗い茶褐色である。

文様　口縁帯は，幅広く，ほぼ垂直に立ち，外面には水平方向に浅く細い板描き凹線文（3条/1cm）を4回に分けて幅広く施している。口唇部には板描き凹線文を2条施しており，ていねいな作りである。

頸帯には長い三角形の鋸歯文帯を構成し，1周の4個所に三角形の透孔をあけている。鋸歯文は，西江2式，同3式よりも小さい。

胴部は，断面が放物線形の突帯をめぐらせて，頸帯，文様帯，間帯に区分している。

文様帯の弧帯文は，連続渦文である。2条を1単位にして，一定の間隔をあけて併行する2本で横S字形を描き，そのなかを左下がりの連続斜線で填めている。ただし，2条はその上下の斜線帯と連接しているために1条のようにも見える。なお，西江例のように同一個体のなかに，斜線の中央に1条をいれているばあいがある（図3-4）。第1文様帯は1周125cm，第4文様帯は1周130.5cm，渦文の1単位の長さは平均17.5cm，1周の間に7単位をめぐらせている。渦文の2つの単位が結合する個所では，渦文の先端は幅があまり狭くならずに接している。渦文の上に斜線文帯をr字形に配している。斜線の数は3～6条である。渦文の下は，上と同様に2つの斜線文帯を逆r字形，または変形して入字形に配している。

透孔は，施文後に文様にあわせて渦文の個所に巴形，斜線文帯の上下に三角形を穿っている。胴部の各文様帯の配置は，たとえば第4文様帯で隣接する2つの渦文の中心である巴形を結んだ線の半分の位置を下に延長すると第3文様帯の渦文がきて，第2文様帯になると，また第1文様帯と同じ位置に戻るというように，単位文様をダイヤ形に配置している。この原理は，宮山式特殊器台に

も共通して認められる。

間帯は，板描き凹線文（5 条 /1cm）を施しているが，浅く痕跡化しつつある。

胴部の内面は横方向のヘラ削りで薄く仕上げている。口縁部付近の内面は，口縁帯は横ナデ，受け部からヘラ削りが始まり，脚部付近の内面は，台の上端付近からヘラ削りが始まっており，西江 3 式と変わるところはない。

脚部裾に板描き凹線文はあるが，鋸歯文は描いていない。

なお，上原遺跡出土の 1 例は，胴径約 36cm，推定総高約 80cm で小型である。間帯幅 7.4cm，文様帯幅 6.5cm で，その割合は 1：0.88 で，文様帯の幅が間帯の幅よりもせまい。間帯は，板描き凹線文ではなくナデ仕上げに変わっている。内面はヘラ削りで薄く仕上げている。もう 1 例は，逆に，胴径 47.6cm，推定総高約 120cm の超大型品である（図 3-15）。弧帯文の表現は簡略化が進み稚拙で，間帯には粗い板描き凹線文を施している。

特殊壺　西江遺跡の特殊壺 2（図 4-9），向木見遺跡の特殊壺破片［鎌木 1966：334］（図 4-7），赤磐市山陽便木山遺跡の頸部の下半から胴部にかけての破片［神原 1971：第 22 図 K-1（図 6-9）］，岡山市下足守長坂 1 号墳の器台棺に使っていた口頸部を欠く胴部だけの特殊壺 7［草原編 1999：図 21-7］（図 4-8）は，この型式に属する。

矢谷墳丘墓の北溝出土の 3 個体と東溝出土の 1 個体［金井・小都編 1981：Fig.31 の 33・34，Fig.35 の 43・44，Fig.36 の 47］（図 4-5・6）は，底部に製作時に大きく穿孔しており，向木見式または矢谷 1 ～ 3 式の特殊器台に伴ったと考えるが，特定することは困難である。

西江例は，口縁部径 33.5cm，口縁帯の幅 8.8cm で，垂直に立ち上がり，全面に板描き凹線文（4 条 /1cm）をめぐらせている。胴部は，肩が張った低い算盤珠形で，径 56cm に対して推定総高 50cm，側部に 2 本の低い突帯（幅 1.0cm，厚さ約 4mm）をめぐらせ，突帯上方から上胴部下端に板描き凹線文（10 ～ 11 条）をめぐらせ，その上方に 3 ～ 5mm 間隔で短線の切込みを入れている。上下とも突帯上に 5 条の板描き凹線文を施している。突帯間は無文である。頸胴部界にも 5mm 間隔で水滴形短線を刺突文状に入れている。胴部下半は斜めハケ目仕上げで，底部近くになると，横方向にヘラ削りしている。底部は欠失しているが，焼成前に大きく穿孔していると推定する。

矢谷遺跡の特殊壺のうち底部に製作時の穿孔をもつ 4 個体（図 4-5・6，図 7）は，そのなかに型式変化が認められる。おそらく底部をほとんど完成した後に丸く抉って穿孔しているのであろう。底部付近の形態と孔の大きさ，作り方からすると，報告書番号 33（径 6.4cm）（図 7-23）がもっとも古く，ついで 44（13.2cm）と 47（11.6cm）（同-7・3），43（12.8cm）（同-4）がもっとも新しいであろう。口縁部径，胴部径と推定高は，33（同-23）が 34.4cm，44.8cm，57cm，44（同-7）が 34.8cm，50.4cm，66cm である。完形に復元された 43（図 4-6）は，口縁部径 32.8cm，胴部径 50.0cm，底部径 13.8cm，総高 61.6cm である。

長坂例（図 4-8）は，胴部径 48cm，突帯は 2 本で 2mm 突出する程度で低く，側面に板描き凹線文を施している。突帯間は無文である。底部は製作時に径 15.4cm の大きな孔をあけ，内面は孔のまわりを指先で押さえながら整形している。

便木山例（図 6-9）は，胴部下半を失っているが，この遺跡からは向木見式特殊器台（図 6-10）が出土しているので，向木見式と考える。

e　便木山式

岡山県赤磐市山陽（旧・赤磐郡山陽町）便木山遺跡のD溝出土の特殊器台の細片D-1～D-9にもとづいて設定する型式である（図3-7，図6）［神原1971：第23図40-48，赤磐市教育委員会蔵］。弥生後期後半の多数の木棺土坑墓からなる墓地遺跡である。岡山県営山陽新住宅市街地開発事業の事前調査で，1970-71年，山陽団地埋蔵文化財発掘調査団が発掘した。同じD溝では向木見式特殊器台D-10～14が混在していた。脚部から第1間帯にかけての破片D-8も向木見式に属する。

形状・大きさ　胴部文様帯から間帯にかけての高さ17cm，幅11cmの小破片がのこっているだけである。間帯幅6.4cm，文様帯幅6.8cm，間帯幅と文様帯幅の割合は1：1.06である。胴部径44.8cm，胴部上半に向かって太くなるのであろう。推定高60cmの小型品である。

胎土は雲母片と角閃石片を含む暗い茶褐色である。

文様　胴部は，断面が横M字形の突帯によって，頸帯，文様帯4段，間帯5段に区分していると推定する。

文様帯の弧帯文は，連続渦文である。2条一組または1条の1本で，一定の間隔をあけて併行する2本でS字形を描き，そのなかを左下がりの連続斜線で填めている。渦文の1単位の長さは14cm，1周の間に10単位文様をめぐらせていると推定する。渦文の2つの単位が結合する個所では，渦文の先端は幅がせまくなり尖って，隣と接している。渦文の上と下の空間はW字形に区画して短い斜線でびっしりと填めて複合鋸歯文風にしている。斜線の数は6～10条である。

透孔は，施文後に文様にあわせて穿っている。渦文の個所には，右下向きの尾をもつ巴形，斜線文帯の個所では上に下向きの小さな三角形を1つ，下に上向きの1つの透孔をもっており，1単位文様は3つの透孔をもっている。

間帯は，板状の原体を水平に動かして板描き凹線文（4条/1cm）を施している。

口縁帯は，幅広く，ほぼ垂直に立ち，外面には水平方向に板描きの浅い凹線文を施している。

胴部の内面は横方向のヘラ削りで薄く仕上げている。

特殊壺　この型式に属する特殊壺の形態は明らかでない。

f　矢谷1式

矢谷（やだに）四隅突出墳丘墓は，広島県三次市東酒屋町松ヶ迫に所在する。墳丘を囲む北溝，東溝1，同2，南溝の4個所および墳丘上の墓5と9の2基の上に投棄または放置した状況で多数の土器がのこされていた（図7）。墳丘上の墓の配置関係から判断すると，この墳丘墓の中心は墓5であって，対になるのは墓9である。墓2も有力者の墓であろう。特殊器台と関係するのは墓5と2であって，前者の葬儀に伴う土器が墓上と東溝1に，後者に伴う土器が北溝にのこされているのであろう。土器は，地元産の注口付き壺，鼓形器台，高坏3，坏1と特殊器台9個体，特殊壺9個体を確認できる（個体数はいずれも推定）。特殊器台は，型式分類すると西江1式[(3)]，西江2式，矢谷1式，同2式，向木見式の5型式になる。あるいは，さらにもう1型式，矢谷3式を設定したほうがよいかもしれない。矢谷墳丘墓出土の特殊器台は，いずれも小破片であるけれども，発掘報告書ではそれを巧みに図上復元しているので，私が調べた結果も使って記載する。

矢谷1式は，矢谷墳丘墓出土の特殊器台1にもとづいて設定する型式である（図3-9）。完全に

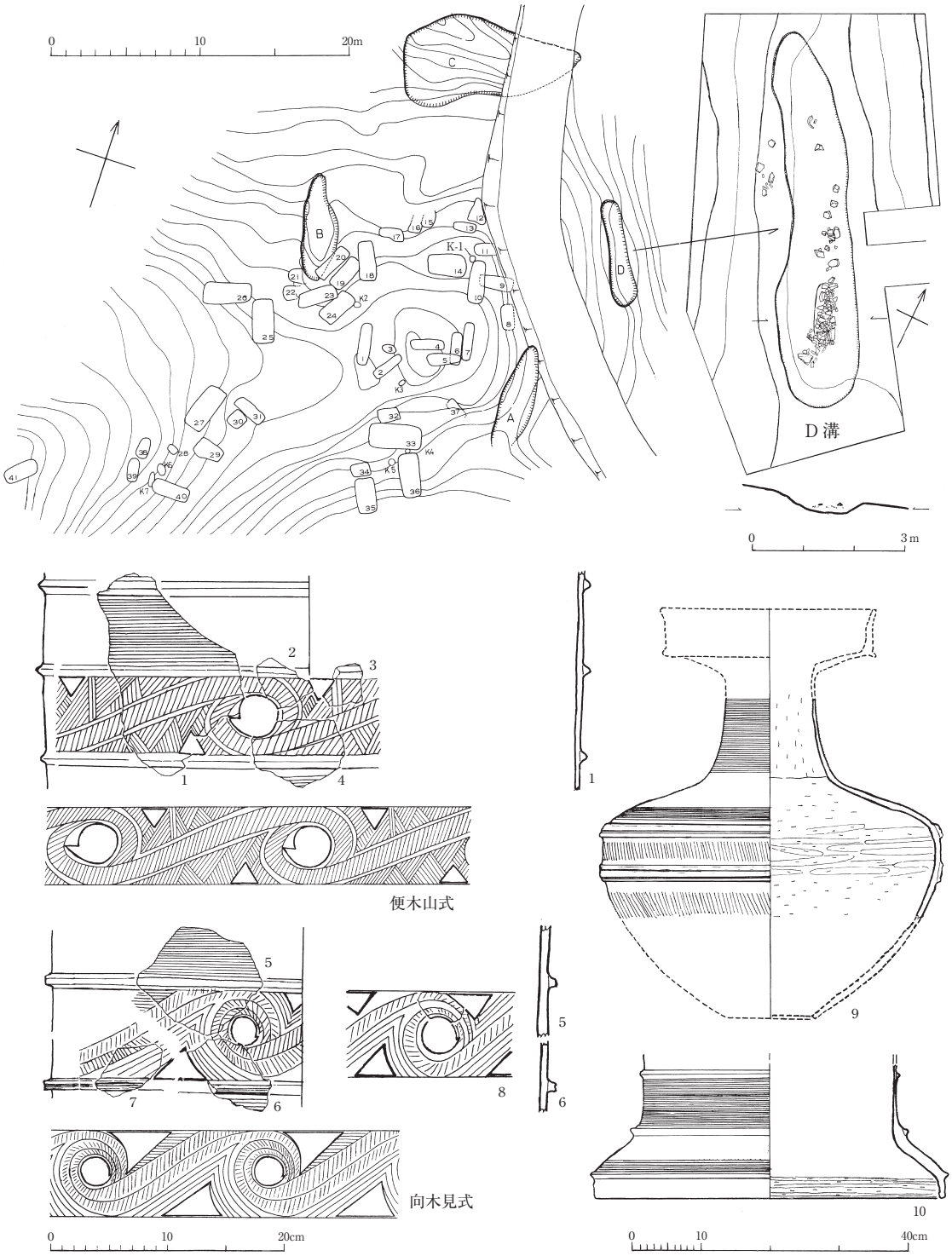


図６　赤磐市便木山墳丘墓と出土した特殊器台（［神原 1971］から作成）
Ｄ溝から特殊器台の便木山式と向木見式が出土，Ａ溝とＣ溝から出土した特殊器台の細片および棺に転用したK1の特殊壺は向木見式と推定。1～6・10 Ｄ溝，7・8 Ｃ溝，9 K-1から出土。

復元して，国の重要文化財に指定されている個体である［金井・小都編 1981：本文編 14-15，図録編 Fig.31 の 36，広島県立歴史民俗資料館蔵］。類例は，総社市下原伊与部山（城山頂部および1号墳丘墓西鞍部）から細片が出土している［近藤編 1996：45，図 31-4･5･7，岡山大学考古学研究室蔵］。

形状・大きさ　胴部は，文様帯4，間帯4，頸帯1と推定する。口縁端径 47.6cm，脚部端径 45.2cm で，口縁帯幅 10.8cm，頸帯幅 5.2cm，第2間帯の幅 6.4cm，第2文様帯の幅 7.2cm，第2間帯と第2文様帯との割合は 1:1.12，第4間帯の幅 6.0cm，第4文様帯の幅 8.8cm，その割合は 1:1.46 である。第1間帯上端の径 38.0cm，頸帯径 44.0cm で，胴張りはほとんどない。推定高 99.6cm。口縁帯は内傾し，外面は板描き凹線文（4条/1cm）を施している。

頸帯は無文で，18.5cm 間隔で縦長三角形の小さな透孔を上向きと，下向きと交互にあけている。

文様　胴部文様は，等間隔で6条の併行する線でS字形の連続渦文を描き，そのうち2，3条目間と，4，5条間を垂直ないし左下がりの同方向の斜線で填めている。ただし，下側の斜線帯は，渦文の下が切れている。単位文様間は約 14.5cm で，その間隔はつまっている。胴部を1周する間に9単位あると推定する。透孔は，左上に尾を向けた巴形と逆三角形・三角形で，文様1単位につき3つである。

間帯は，横方向の板描き凹線文で，1間帯を段違いに3周させて填めている。

脚部の裾は，板描き凹線文の上部に裾上端に達する鋸歯文を施している。

特殊壺　矢谷1式と確実にいえる特殊壺を示すことはできない。この型式の祖型を西江3式に求めるならば，矢谷遺跡の特殊壺のうち，西江3式～向木見式に属する個体のいずれかが組み合うのであろう。その候補は，北溝出土の1点［金井・小都編 1981：図録編 Fig.31 の 43］（図 7-4）である。

g　矢谷2式

矢谷2式は，矢谷墳丘墓出土の特殊器台3［金井・小都編 1981：図録編 Fig.34 の 39］にもとづいて設定する型式である（図 3-10）。

形状・大きさ　胴部の第4文様帯から口縁帯の最下までと，脚部から第2文様帯までの小片があるにすぎず，復元図はかなりの推定を加えて作成されているので，以下に示す数値は正確とはいえない。胴部は，文様帯4，間帯4，頸帯1と推定する。

報告書の付図では，口縁部径 43.6cm，胴部径 38cm，脚部径 49.6cm となっているが，脚部径が口縁部径を大きく上回ることは考えにくく，胴部径を参考にして約 42cm と推定しておきたい。頸帯幅 4.0cm，第2間帯幅 6.0cm，第1・第4文様帯幅 6.4cm，第1文様帯の径 37.2cm，頸帯径 38.0cm で，胴部第4文様帯付近にわずかに胴張りがあると推定する。間帯の幅 6.0cm，文様帯の幅 6.4cm，その割合は 1：1.06 である。復元高約 80cm，向木見系特殊器台としては小型である。

文様　胴部文様は，2本の綾杉文で連続蕨手文を描いており，特殊器台で唯一の例である。2本の綾杉文は，間隔を広くあけ，上下とも三角形の透孔を囲むV字形文は蕨手文のカーヴに合わせてr字形に描いている。透孔は，巴形1，三角形2の計3つである。

間帯は板描き凹線文，脚部の裾と台との屈折部は，軽くつまみあげる程度であって，突帯文ではない。脚部裾には連続鋸歯文をめぐらせているが，裾の下半部に寄っている。

特殊壺　矢谷墳丘墓出土の特殊器台には，この遺跡独自の型式を含んでいるが，特殊壺には独自

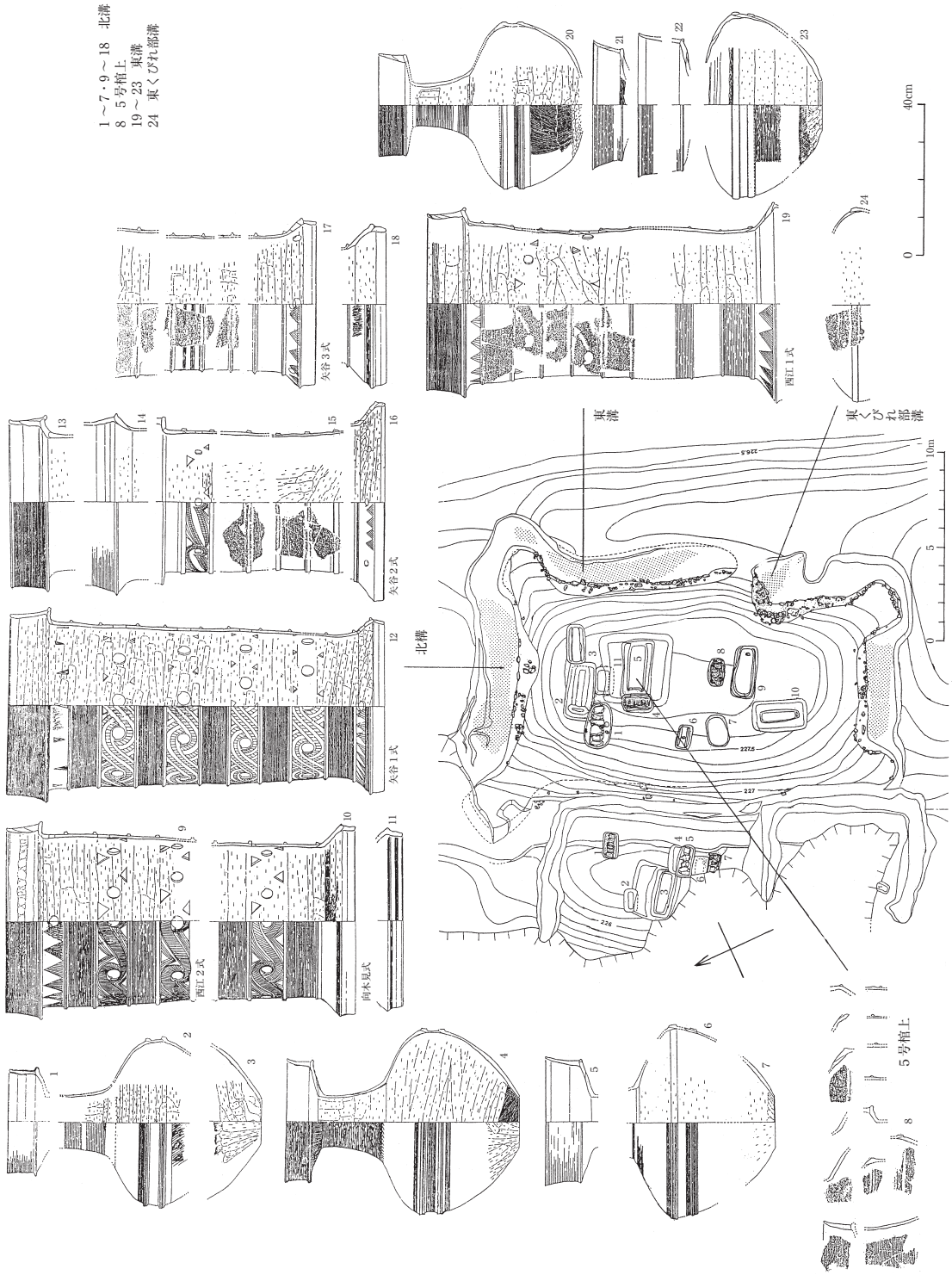


図7　三次市矢谷墳丘墓の特殊器台・特殊壺の出土位置（[金井・小都編 1981，加藤 1996]から作成）
東溝には主として中心主体の5号棺，北溝には主として2号棺および1号棺・3号棺に伴う特殊器台・特殊壺を廃棄したと推定する。

のものを指摘することはできない。したがって，西江１式～向木見式の特殊壺のどの型式と組み合わさっていたのかが問題となる。出土位置と大きさ（下突帯直下の胴部径43.2cm）から推定すると，北溝出土の１点（Fig.36の46）（図7-2）は，その候補である。突帯の高さは高く，２本の突帯間は無文である。上肩部に刺突文をめぐらせている。胴部下半を欠失しており，底部付近の形態が明らかでないので，矢谷２式の特殊器台に伴う特殊壺であると断定まではできない。

2　向木見系特殊器台の成立と変遷

向木見系特殊器台に先行する西山系特殊器台は，古い型式の西山式と，新しい型式の上原式に細分できる［春成2017：14-17］。西山式特殊器台は，倉敷市（旧・吉備郡）真備町西山遺跡から特殊器台棺として見つかった２個体のうちの１個体にもとづいて設定した型式である［春成2017：14-15･16］。組み合わせていたもう１個体は向木見式であって，器表の風化が著しく，報告書掲載の実測図にある第1･第２文様帯はごく一部のこっている第３文様帯を復元して描きいれたものである。西山遺跡の特殊器台棺は，別々の保存条件下にあった，時期と型式を異にする２個体を組み合わせたものであって，その時期は西山２号墳に伴う４世紀代の可能性がある（図8）。

西山式の主文様は，先行する中山２式の文様帯全面に施した連続人字文をうけて，文様帯の中央横方向に連続渦文を展開し，その上下に連続人字文を配している。

西山系は，その文様の型式を正統に受け継ぐ宮山系のほかに向木見式の系列を派生させている。西山系の連続渦文の背景に使っている連続人字文は，斜線帯の方向を変えながら繰り返していく，やや単調な作業である。西山遺跡の特殊器台には１周６単位，間に間帯をおいて４段で計24単位の連続渦文を描き，渦文の上下の間隙を人字文で填めている。この24単位の人字形文を比較してみると，原則は同じであるけれども，変異の度合いは一様でない。注目すべきは第４文様帯の１単位文様の変異であって，そこには渦文の左下がりの斜線部分と，弧帯の左下がりの斜線帯の間に右下がりの斜線帯が挿入されているように見えることである。この偶然に生じた部分文様にヒントを得て，弧線間に斜線帯を挿入する向木見系最古の文様をもつ矢部南向式の文様は案出されたのかもしれない。

西山式－上原式にもっとも近い向木見系は，文様原理，透孔の位置と数，連続渦文の上下の人字文の形態からみて倉敷市矢部南向遺跡の矢部南向式特殊器台である。向木見系をもっともよく特徴づけるＳ字間を斜線でうめる連続渦文は，この型式に初めて登場する。上原式は，文様構成は西山式にもっとも近いけれども，一方において人字文の一部を省略している点では矢部南向式と並び，透孔の減少は矢部南向式よりも後出的である。矢部南向式が成立したあと向木見系は，西江２式－西江３式－向木見式の順に文様の変化をスムーズにたどることができる。この系列の型式変化の延長上に，あるいはその途中で宮山式が成立したことを想定することは不可能である（図9）。向木見系の成立は，宮山式の年代よりも古いけれども，向木見系は宮山式の成立には関係していない。なお，各文様帯の単位文様の巴形透孔を上下でダイヤ形，全体としては斜格子状に配置する原理は，向木見系では共通するようであり，宮山式特殊器台もまた同様である。

矢部南向式特殊器台は，矢部南向遺跡の土器溜まり遺構から出土した。この遺構からは，土器の表面が剥離した破片や，孔があいた破片が集中的に見つかっており，焼成に失敗した土器を一括廃

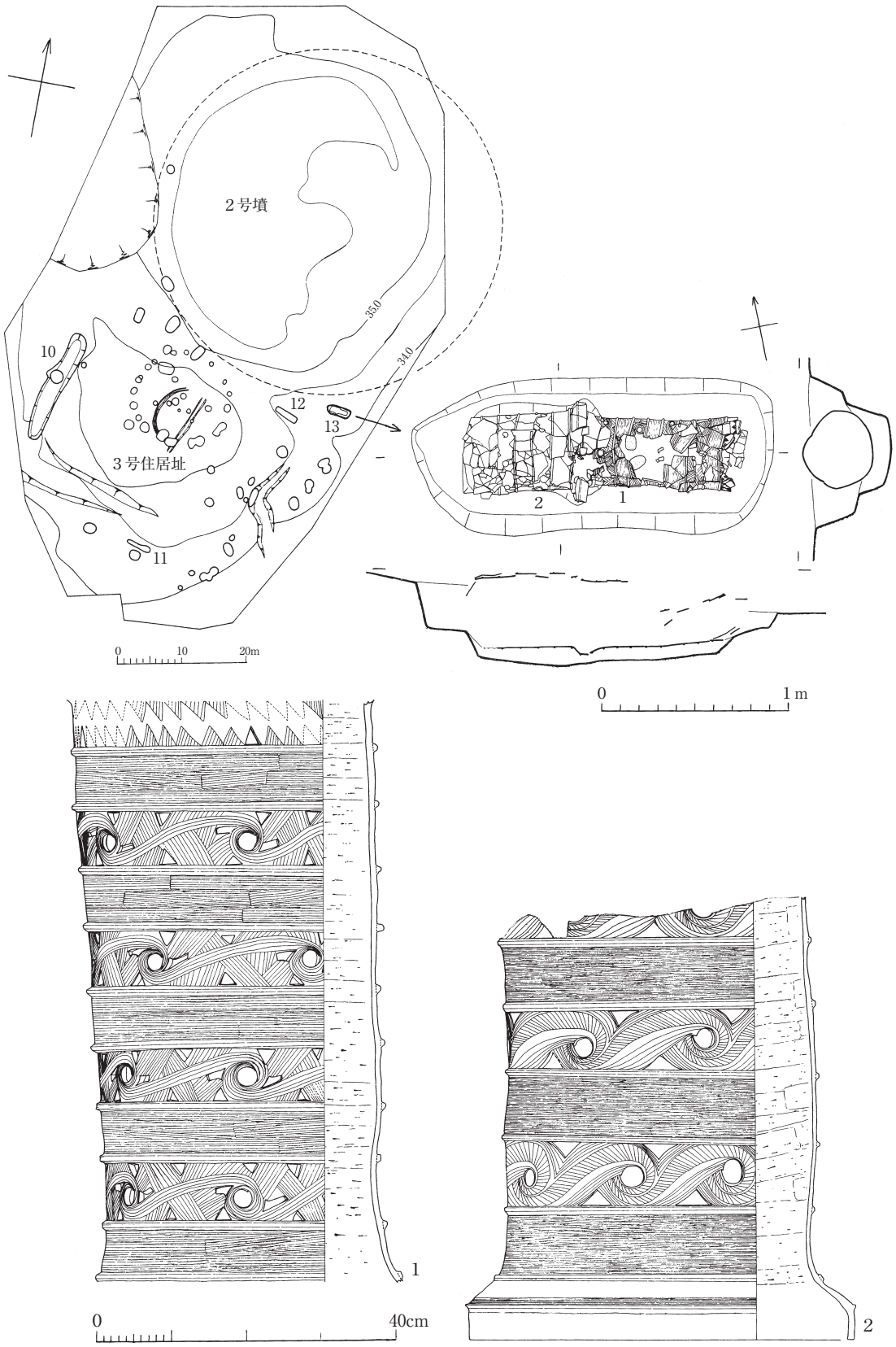


図８　倉敷市西山遺跡の特殊器台棺の出土位置と出土状態（［正岡・山磨・平井 1979］から作成）
２号墳は４世紀中頃の円筒埴輪をもつ円墳，３号住居跡は弥生時代後期に属する。
西山式と向木見式の特殊器台を組み合わせて棺に転用したのは，２号墳の時期か。

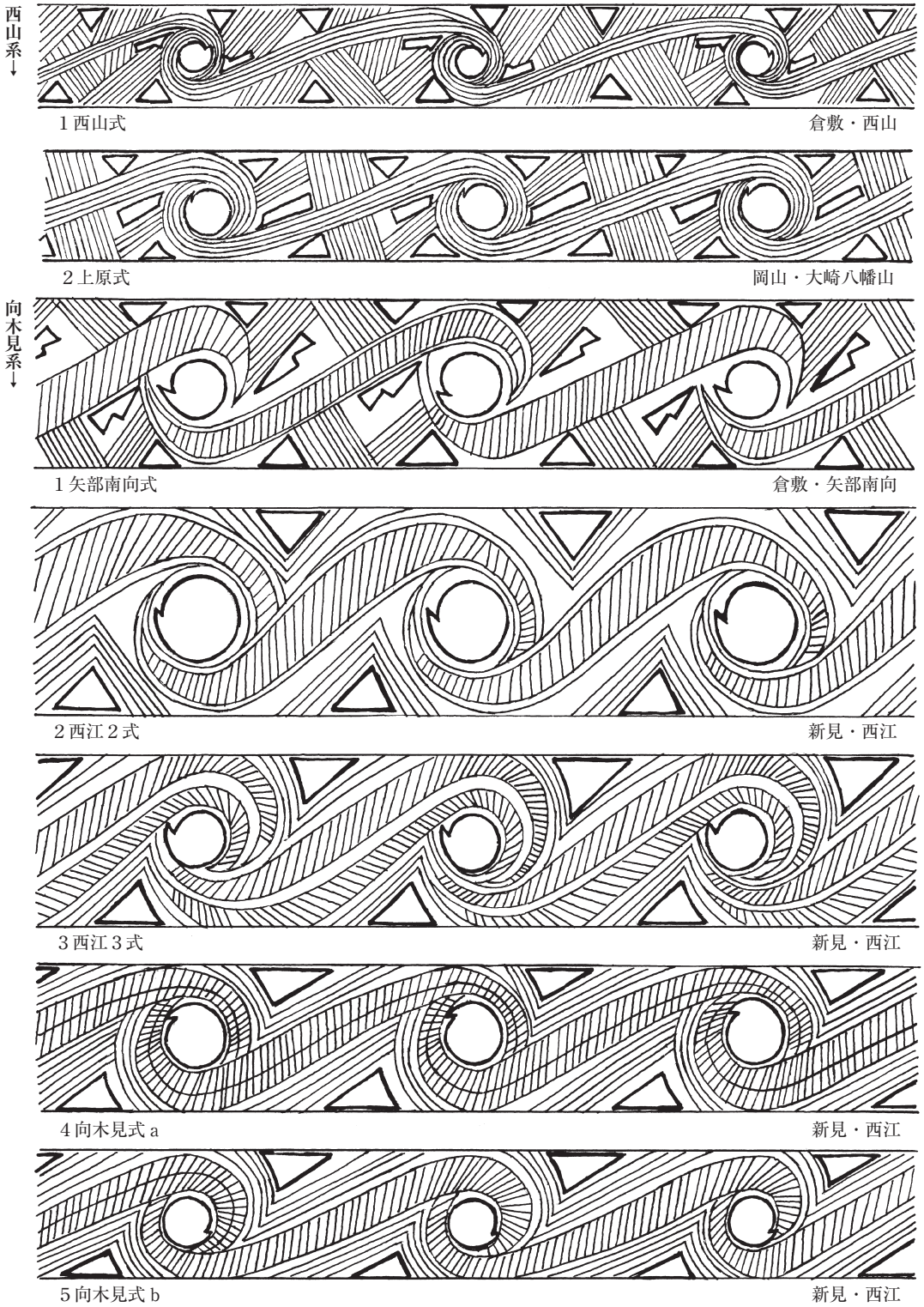


図9　向木見系特殊器台の文様の成立と変遷
向木見式aと同bは同一個体に施文してある。

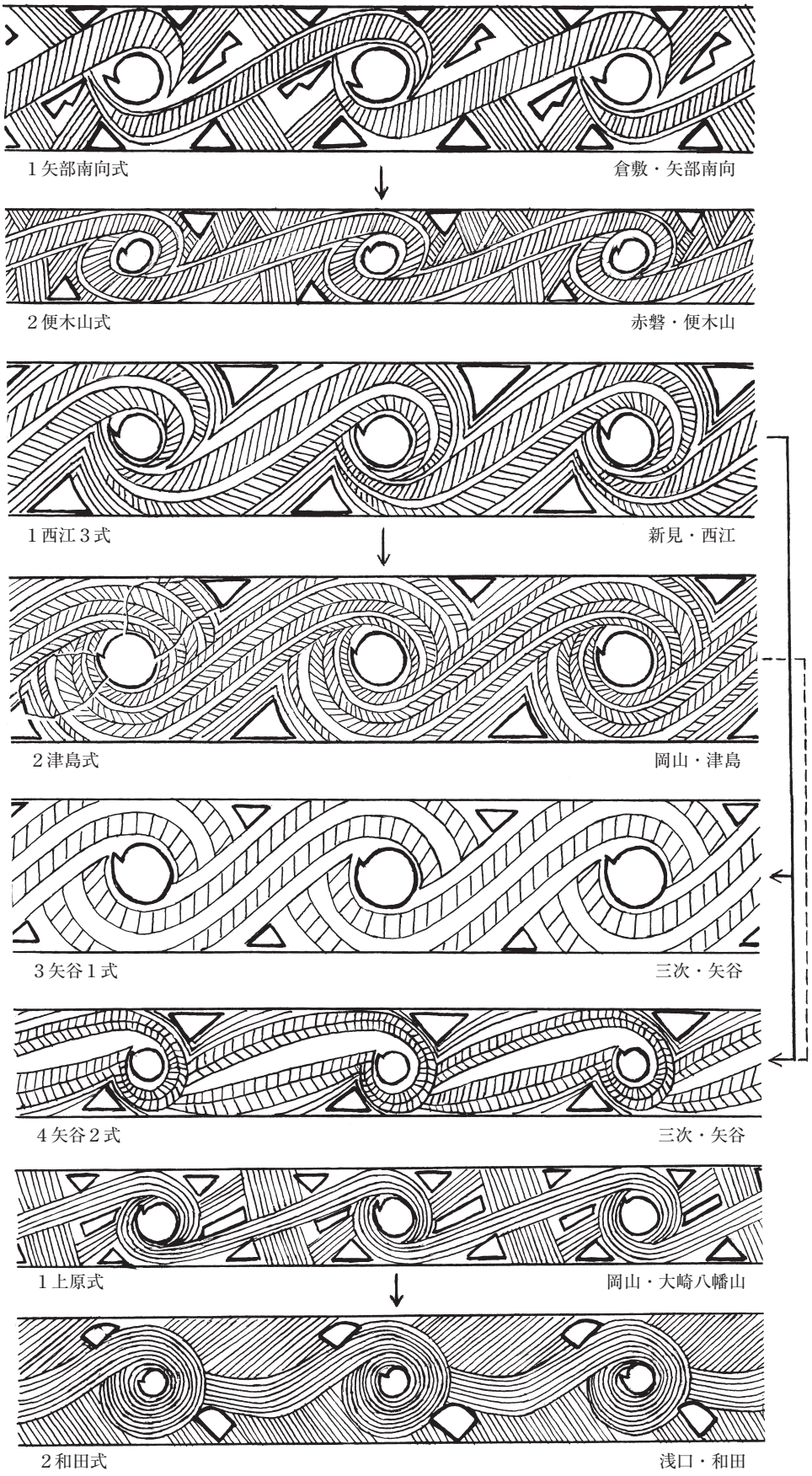


図 10　向木見系および上原式から派生した文様

棄したものという［田崎 2004：70］。特殊器台も，表面の剝離痕跡が認められること，表面の風化が認められないことから，焼成失敗品である可能性が高い。特殊器台が集落遺跡から出土することは稀である[(4)]。矢部南向遺跡の特殊器台は失敗品であるとすれば，それを製作した場所，つまり矢部南向式が生成した地域を足守川地域に限定するうえで重要な意味をもつ。

矢部南向式のあとを受け継いだのは，西江２式である。西江２式～向木見式特殊器台の基本的な形態および内外面の調整法は，矢部南向式と変わるところはない。僅かばかり上に太くなる胴部にしっかりした口縁帯をつけ，間帯５，文様帯４，頸帯，そして脚部をもっている。推定高は，矢部南向式 100cm，西江２式 104cm，西江３式 100cm，向木見式 104cm であって，ほとんど同じ高さを保っている。もっとも，西江遺跡出土の３点は，型式はちがうけれども，同一人が少しの年月をおいて製作した可能性も否定できない。向木見系の諸型式のちがいは，胴部文様の変化がもっとも大きい。しかし，それもこれまでは個体差であって時期差とはみてこなかったくらいであるから，文様のちがいもそれほど大きなものではない。頸帯の鋸歯文は，徐々に小さくなりながら向木見式までつづき，脚部裾の鋸歯文は西江３式までで，向木見式にはない。脚部の裾と台との屈折部分が，貼りつけ突帯状になっているのは西江３式までであって，向木見式になると裾の末端を台に覆いかぶせたような形に変わっている。矢部南向式に始まる向木見系の最後に向木見式が位置していることはまちがいないだろう。向木見系を特徴づける文様は，併行する２本のＳ字形の間を斜線でうめる意匠であって，矢部南向式で成立して向木見式まで継承されている。

便木山式特殊器台は，矢部南向式の文様の渦文の上下のＮ字形文を鋸歯文に変形させているので，製作時期は，矢部南向式より少しくだるのであろう。西山系の文様の崩れであることは明らかであって，便木山遺跡の近くで製作したことを推定させる。

矢谷１式特殊器台の器形は，向木見系と変わるところはない。文様は，西江３式の綾杉文の斜線の方向を同方向に変えて新たな文様を生み出している。渦文の下端が切れている点も，西江３式との親縁性を示している。頸帯の三角形の透孔は，西江２・３式の鋸歯文＋円形透孔，向木見式の鋸歯文＋三角形透孔と関連をもっている。その点では，向木見式までくだる可能性を完全に排除することはできないけれども，脚部の裾に鋸歯文をもっている点で，祖型は西江３式と考えるべきであろう。矢谷１式は，備中の総社西部東端に所在する伊与部山遺跡でも見つかっているので，製作者が三次付近の人であったと確言することはできない。

矢谷２式特殊器台は，綾杉文からなる蕨手文をヘアピン状につないで一見すると２帯の弧帯文が間を空けて併行しているようにみえる。２帯の斜線文を併行させ，間に２条の線をいれて綾杉文を構成した連渦文をもっているのは西江３式である。矢谷２式は，西江３式の２帯の斜線文をそれぞれ綾杉文におきかえた連渦文とみると，西江３式の変異形と理解することができる。脚部裾の鋸歯文が小型化して退化の傾向をもっている点も，西江３式よりも新しいことを示唆している。矢谷２式は，向木見式と併行する矢谷独自の型式と考えておきたい。

ここで，備中南部で地域を異にして併存すると考える向木見系と宮山系とを比較してみよう（図11）。向木見系で注目すべき点は，宮山系とくらべて，より大型であることである。すなわち，向木見系は総高が 100 ～ 104cm，口縁部径 48cm，胴部最大径 42cm に対して宮山式の１個体ではそれぞれ 94cm，39cm，36cm であって，向木見系は宮山系よりも一回り大きい。文様帯の数は，向

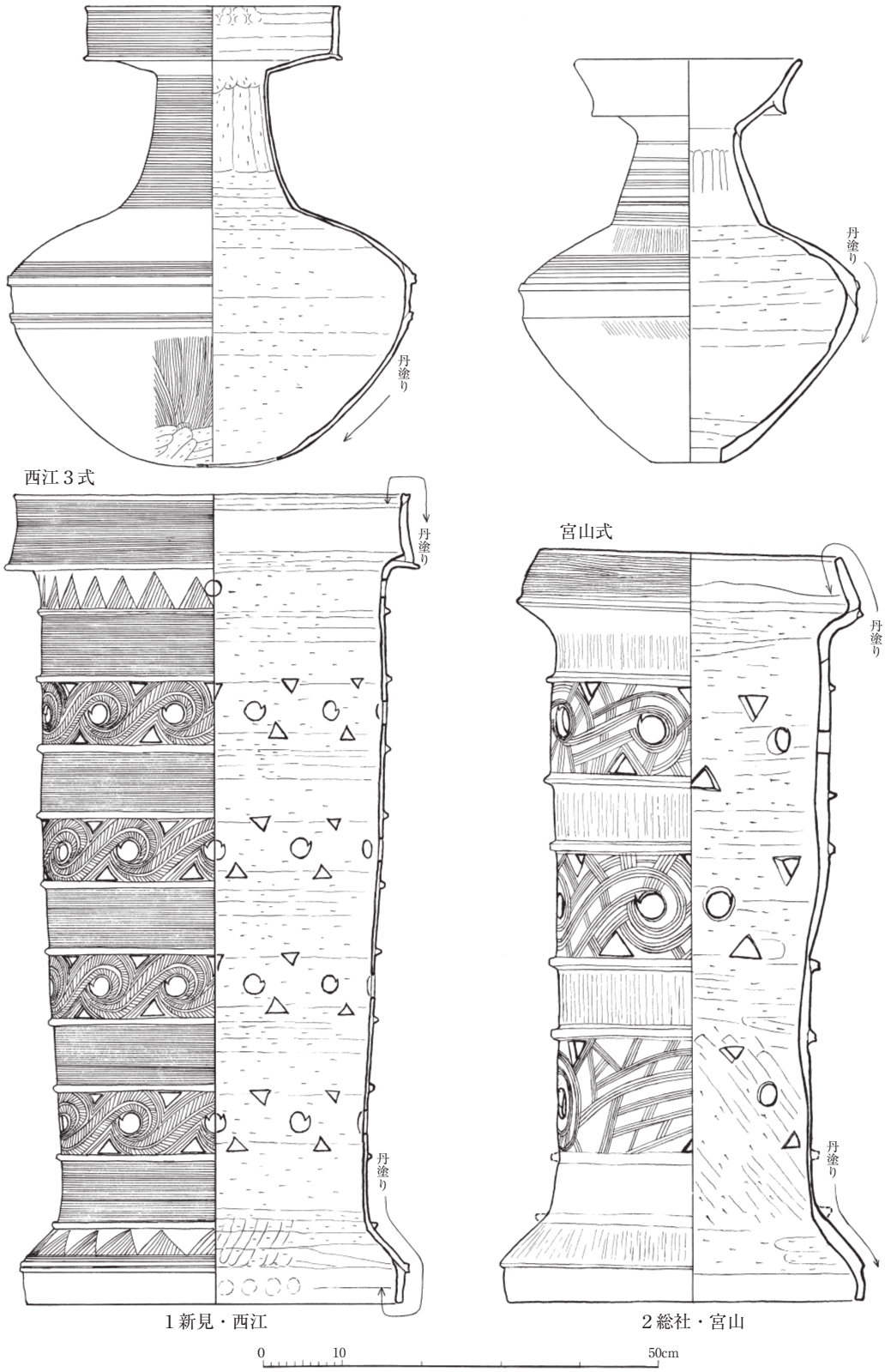


図 11　向木見系と宮山系の特殊壺・特殊器台の器形・文様の比較図（一部復元）
宮山の特殊器台の図は，中園聡研究室が 3Dモデルにもとづいて作成した原図を整図した。

木見系では向木見式まで4帯存在するが，宮山系ではおそらく柳坪式まで4帯で，宮山式から3帯に減じ，その幅は著しく広くなる。

向木見系特殊器台では口縁帯が直立して板描き凹線文を施し，口縁端部は面取りしてコ字形に作り，端面を水平にしている一方，宮山式特殊器台では口縁帯が内傾して外面に痕跡的に板描き凹線文を施し，口縁端面は内傾して丸く収めている。口縁端のこのちがいは，向木見系における最上部の粘土帯を宮山式では付加せずに，内傾接合するはずの接合面をナデ仕上げして口縁端を形成した一種の簡略化の結果である。

胴部の間帯には，向木見系では板描き凹線文を向木見式まで施しているのに対して，宮山式では縦板目（縦ハケ）の後にナデ仕上げに変わっている。

脚部は，先行する中山1式，同2式とくらべると，両系列ともに裾部の広がりすなわち径が小さくなり，立ちあがりはきつくなる。裾部の鋸歯文は，向木見系では西江3式までで向木見式にはない。それに対して，宮山系では西江1式で早くも喪失しており，柳坪式，宮山式，弁天塚式にはない。

以上のように，向木見系の特殊器台には伝統を守ろうとする意識がつよいのに対して，宮山系のそれには伝統から逸脱して簡略化の傾向があることをうかがえる。

3　向木見系特殊壺の成立と変遷

向木見系の特殊壺は，ほぼ垂直に立ち上がる口縁帯，長い頸部，胴部中位の2本の突帯，胴部下半の外面と底部付近のヘラ削りを特徴とする。底部はヘラ削りによる丸底で，西江3式までは焼成後，おそらく使用後に軽く叩いて打ち抜いて径7～15cmの孔をあけている。ヘラ削りによる丸底の特殊壺は，赤磐市愛宕山遺跡と津山市上原遺跡から出土した上原式特殊器台に伴出しているから，向木見系の特殊壺はそれを継承しているのであろう。そして，底部の穿孔は向木見式から製作時に変わり，成形時に最初から大きな孔をもつ底抜けの底部をもつ植木鉢形へと変遷する。孔の径は11～12cmである。それでも，外面の胴部下半にヘラ削りを痕跡的にのこしている。

向木見系の特殊壺の胴部突帯は，西江2式から向木見式まで2本であって，上の1本は貼りつけ突帯，下の1本は一種の削り出し突帯である。2本の突帯間に鋸歯文を施すのは西江2式までで，西江3式以後は無文になる。

上突帯から上の胴部上半には，板描き凹線文を向木見式まで施しており，その上部の刺突文は向木見式の古い段階までのこっている。頸部の刺突文も，西江遺跡例では向木見式までのこっている。

宮山系の特殊壺と比較すると，向木見系では口縁帯が垂直に立ち上がり板描き凹線文を最後の向木見式まで施しているのに対して，宮山式では口縁帯が朝顔形に開き，口縁帯，頸部とも板描き凹線文を痕跡的にのこしているだけである。特殊壺においても向木見系は宮山系よりも伝統を守る規制力がつよいといえるだろう。

宮山式の特殊壺は3例あるだけで数が少ないが，底部付近外面のヘラ削りを確認できない。しかし，弁天塚式の特殊壺にはこのヘラ削りがある。その一方，箸墓出土の胴部に3本の突帯をめぐらす特殊壺の底部付近外面にはヘラ削りはない。この型式の壺は，突帯を1本減じて都月系埴輪の権現山式に存在する。弁天塚式特殊壺のヘラ削りは向木見系や矢藤治山系の影響であるのか，弁天塚式特殊壺の成立について考えるなかで，見極めることにしたい。

❸……矢藤治山系特殊器台の諸型式

後期特殊器台のもう一つの系列は矢藤治山系である。この系列は，西山系の上原式につづく矢藤治山式が確かな型式として知られているだけである。ただし，河内の八尾市小阪合遺跡で１細片が見つかっているにすぎないけれども，矢藤治山墳丘墓にみない意匠であるので，小阪合式を仮に設定しておく。

１　矢藤治山系特殊器台の記載

a　矢藤治山式

岡山市西花尻矢藤治山墳丘墓出土品［近藤編 1995，岡山大学考古学研究室蔵］を基準にして設定した型式である（図 4-5）。近藤義郎を代表とする矢藤治山墳丘墓発掘調査団が 1990 ～ 92 年に発掘調査した。墳丘長 36 m，円丘径 24 m，突出部長 12 m の墳丘の東・西くびれ部を主に，円丘の東・西斜面からも若干出土し，7 ～ 9 個体がある（図 12）。

形状・大きさ　文様帯 4，間帯 5 と推定するが，それぞれ 1 減じた 3 と 4 の可能性もないとは断言できない。口縁部から頸帯，第 5 間帯から脚部まで破片は揃っているが，同一個体で完形になるものはない。口縁帯は垂直に立ち上がる。第 3 文様帯付近を最大径とする胴張りがある。脚部は，く字形の屈折部に突帯はなく，裾と台を接合したあと，台側を浅く凹めているだけである。突帯の断面は三角形である。

口縁部径 36.0 cm，口縁帯幅 5.0 ～ 5.5 cm で，向木見系特殊器台にくらべると，その 1/2 しかなく，頸帯と合わせると，ほぼ同じ幅になる。頸帯幅 7.4 cm，間帯幅 6 ～ 9 cm，文様帯幅 7 ～ 10 cm，胴径 35 ～ 40 cm，上端径 34 ～ 36 cm，脚部台の径 40 cm と 44 cm がある。推定総高 85 cm と 93 cm で，大小のちがいがある。

文様　口縁帯は，無文，板描き凹線文，鋸歯文の 3 種類がある。鋸歯文には 1 段の個体と 2 段重ねの個体がある。頸帯は無文で，第 5 間帯に大きく鋸歯文を施した個体と，やや小さな鋸歯文を 2 段重ねて描いた個体，綾杉文を横位に 2 段重ねた個体がある。第 5 間帯も施文は，向木見系の特殊器台を参照すると，本来は頸帯に描くべきところをこの間帯に描いていることになる。文様帯は幅広く，4 条で S 字形の連続渦文を施し，その上下に 5 ～ 8 条からなる右下がりの斜線帯を各 1 帯配している。幅広い文様帯に少ない条数で小さめの連続渦文を施しているために，間延びした文様の観がある。渦文は，横 S 字形の左端が収束して巴形の透孔の尾の内側にはいりこんでいることが大きな特徴である。胴部文様の透孔は，文様に先行してあけてあり，尾を左下に向けた巴形，その左上に弧帯をはさんで小さく逆三角形，右下に小さく三角形にあけてあり，文様 1 単位につき 3 つである。文様 1 単位の長さは 10 ～ 12 cm，1 周の間に 10 ～ 11 単位を施していると推定する。間帯は，無文でナデ調整が多いが，板描き凹線文を施した破片が少数見つかっている。脚部の裾は，台にかぶさるように作り，無文である。

内面調整は，縦ないし斜め板目を主として，胴部のごく一部にヘラ削りの個所がある。

特殊壺　口縁端だけを欠くほぼ完形に復元できた品がある（図 4-10）。口縁帯は大きく開く朝顔

形で，外面に上向きの大きな鋸歯文を線刻し，その鋸歯文の間に小さな鋸歯文をさらに重ねている。頸部は長く，上に細く下に太い筒形で無文，胴部は玉ねぎ形，外面の上半部はナデ仕上げ，下半は板目調整後に底部付近の外面をヘラ削りして仕上げている。側面の突帯は2本とも貼りつけており，突帯間は無文である。底部には，焼成前に径18～20cmの特殊壺のなかで最大の孔を穿っている。内面は，斜め～横板目（ハケ）で仕上げている。口縁径30～35cm，胴部径40～45cm，高さ54cmの大型品である。

b　小阪合式

大阪府八尾市若草町小阪合遺跡で発掘され「特殊器台形埴輪」として報告された1小片は，矢藤治山系の胴部文様をもっている（図13）［松下編2005：図67-2124，大阪府文化財センター蔵］。遺物包含層からの出土で，遺構に伴ったものではない。

胎土は，淡褐色で，通常の特殊器台とは異なり，角閃石の含有は確認できない。5条からなるS字形で連続渦文を構成しており，連渦文の間には斜線文を施さず，三角形の大きな透孔をあけているだけである。矢藤治山式の文様を簡略化しているのであろう。矢藤治山式には類例を含んでいないので，わずかこれだけの資料であるが，将来の発見を予想しておきたい。

2　矢藤治山系特殊器台の成立

矢藤治山式特殊器台の器形は向木見系に，文様は上原式特殊器台に由来する。ただし，上原式と矢藤治山式との間のヒアタスは大きいので，その間をうめる未知の型式がこれから見つかる可能性はのこしておいたほうがよいだろう。矢藤治山式の先行型式について，もう少し考えてみたい。

矢藤治山式特殊器台は，足守川の東の吉備中山に所在する矢藤治山墳丘墓から出土しているだけである。吉備中山には中山茶臼山古墳が所在し，都月系埴輪とは異なるヘラ描き文様をもつ中山茶臼山式の埴輪が出土している。吉備中山に所在する墳丘墓・古墳の被葬者たちの生産・生活の基盤は足守川地域であろうから，矢藤治山式を生みだし製作した場所は足守川地域に限定することが可能である。

この地域で製作していた特殊器台は向木見系である。したがって，検討すべきは向木見系と矢藤治山式との関係である。

矢藤治山式は，器形では胴部の太さが上下であまり違わないという点で向木見系と共通し，上に太く，下に細い宮山系の宮山式とは区別される。口縁帯は垂直に立ち上がり，この特徴も向木見系と共通し，内傾する宮山式とは異なる。しかし，向木見系では口縁帯に板描き凹線文を施すことにこだわっているのに対して，矢藤治山式では地文なしで鋸歯文を描いているか，または無文である。宮山式では痕跡的であるが板描き凹線文をのこしている。したがって，矢藤治山式は上記の2系よりも後出的であるといえる。頸帯は横位の綾杉文を施しているか，または無文である。脚部は裾に鋸歯文を施すことはなく，無文である。この特徴は，向木見系最後の向木見式と共通し，宮山式の2例はいずれも無文である。間帯をナデ仕上げで板描き凹線文をめぐらさないのは宮山式と同じで，向木見式にはない特徴であるから，同式よりも後出的である。内面は，板目調整後，部分的にナデによって仕上げている点は，ヘラ削りが徹底している向木見式，宮山式の特殊器台の伝統的な技法

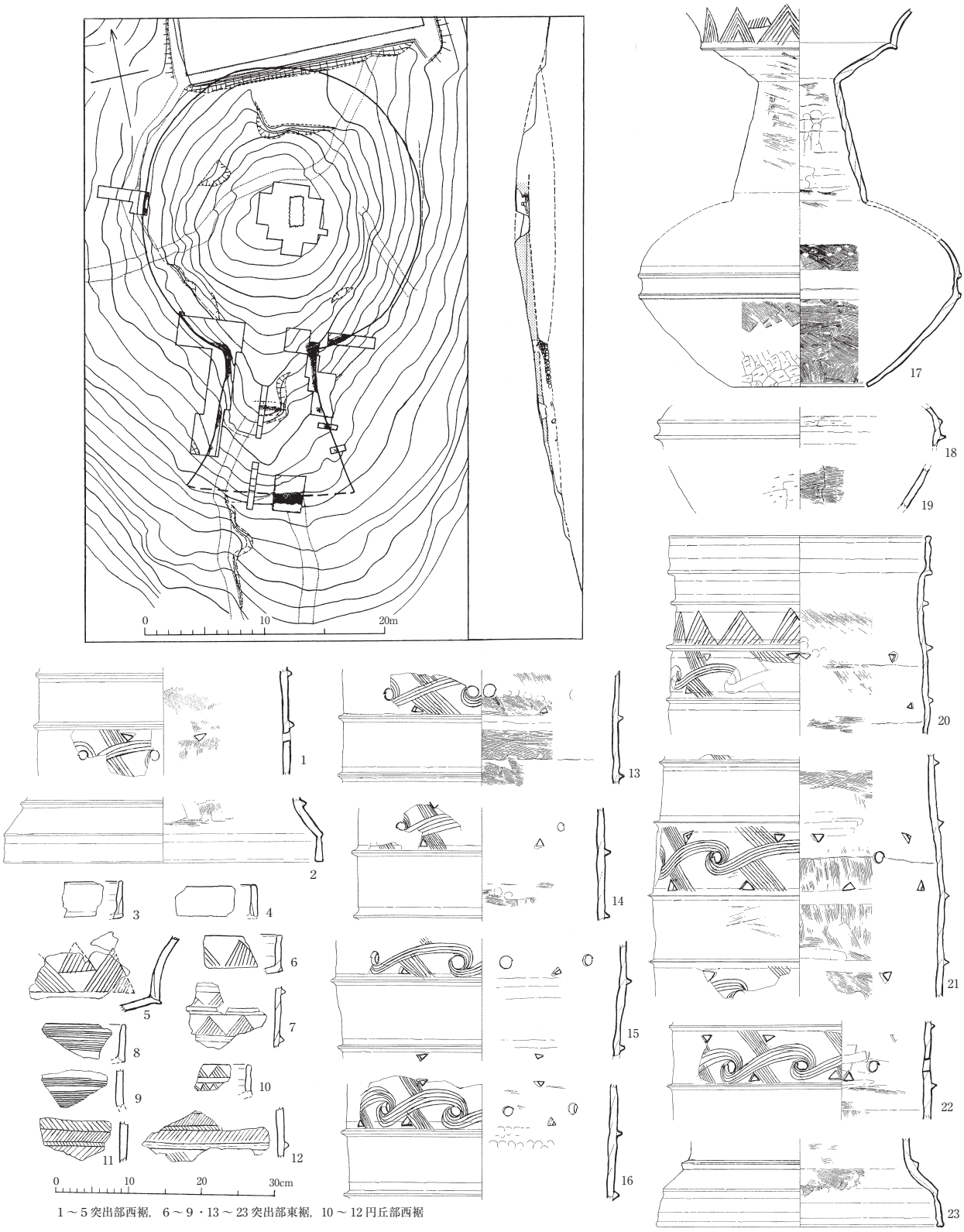


図 12　岡山市矢藤治山墳丘墓の形状と特殊器台・特殊壺の出土位置（[近藤編 1995] から作成）
円形墳丘に前端が撥形に開く突出部を付設し，墳裾に列石をもつ。円丘径と突出部長の比率は 2：1 である。特殊器台は密に配列してあり，円筒埴輪の配列を連想させる。

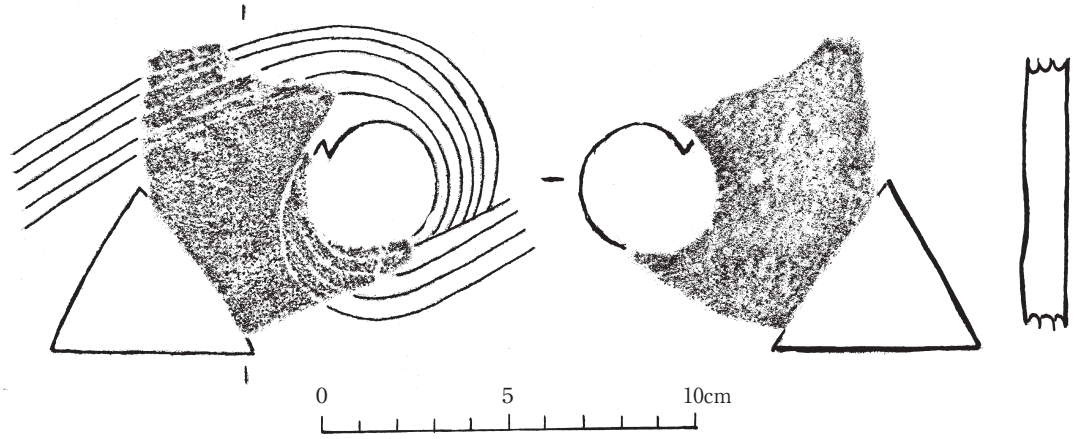


図13　八尾市小阪合遺跡出土の特殊器台破片

から外れている。胎土もまた，赤褐色であって，茶褐色の伝統的特殊器台の胎土で製作していない。文様をくらべてみると，矢藤治山式の渦文は，西山系の上原式をもっとも正統に継承しており，その点では西山系から分岐してすでに独自の文様をもつ向木見系とも宮山系とも異なる（図14）。しかし，矢藤治山式の連続渦文は，広い文様帯に小さく描いてあり，その上下の斜線文も右下がりだけであって，左下がりと組み合わせて逆V字またはV字形の斜線文にした上原式とくらべると，簡略化が著しく進んでいる。

以上のように器形と文様を総合して判断すると，矢藤治山式は向木見式の器形に上原式に由来する古い型式の連続渦文を施した蓋然性がもっとも高い。矢藤治山式は，足守川地域の向木見式，総社東部地域の宮山式の年代よりくだる吉備で最新・最後の特殊器台であって，製作した人には向木見系の伝統を継承することを拒否し，古い文様を復活させる理由があったと考えるほかない。

特殊器台から円筒埴輪への移行は次の課題であるので，ここでは深入りしないけれども，最古のなかの最古の円筒埴輪は，足守川地域の矢部丘陵から出土した矢部B42式である(5)［春成2014：102-103］。特殊器台諸型式のうち都月系埴輪との関係が深く，その先駆型式となったのは，地域との関係からいえば，総社東部地域の宮山式ではない。文様もまた，宮山式と矢部B42式埴輪との連関を示す積極的な証拠を指摘することはできない。向木見式は矢部B42式埴輪と同じく足守川地域で生成したと推定されるけれども，この型式から埴輪への転換はおおよそ考えられない。こうしてみると，円筒埴輪の祖型として挙げ得るのは，矢藤治山式特殊器台だけである。口縁帯の鋸歯文は，両者をつなぐ細い糸である。しかし，文様や内外面の調整技法をとりあげると，矢藤治山式特殊器台から都月系円筒埴輪へと推移するには飛躍的な型式変化を想定しなければならない。小阪合式の簡略化が著しく進んだ胴部文様から矢部B42式埴輪の文様はでてこないので，小阪合式が都月系埴輪につながることはありえない。

3　矢藤治山系特殊壺の成立

向木見系に属する特殊壺の諸型式と矢藤治山式の特殊壺とを比較しよう。

矢藤治山式特殊壺の口縁部は大きく開く朝顔形で，特殊器台とセットとなる特殊壺のなかで宮山

式とともに例外的な存在であって，都月系の特殊壺に連なる要素である。胴部の突帯は，粘土帯貼り付けで，古い手法をとっている。胴部突帯に板描き凹線文を施さない点は，宮山式と共通し，弁天塚式の特殊壺の先駆となっている。矢藤治山式特殊壺の底部は，焼成前に穿孔しており，特殊壺のなかで最大の孔である。その後の都月系の壺形埴輪の底部穿孔がより大きいことを参考にすれば，その年代が特殊器台に伴う特殊壺のなかでもっとも新しいことを想わせる。底部付近の外面はヘラ削りして仕上げているけれども，西江２式，同３式とくらべると痕跡的であって，向木見系の古い製作技法の癖をとどめているという程度である。このヘラ削りは宮山式にはないから，共通性をもっとも多くもっているのはやはり向木見式である。以上，諸属性を取りあげてみると，矢藤治山式特殊壺は，向木見式特殊壺を継承した型式であると考えるほかないだろう。

なお，矢藤治山式特殊壺の口縁帯の鋸歯文は，複線による山形文である。この文様は西江２式特殊器台の胴部文様に存在する。矢藤治山式特殊器台の胴部文様に上原式の連続渦文を採用しているのと同じく，古い文様を復活させて使用している可能性があろう。

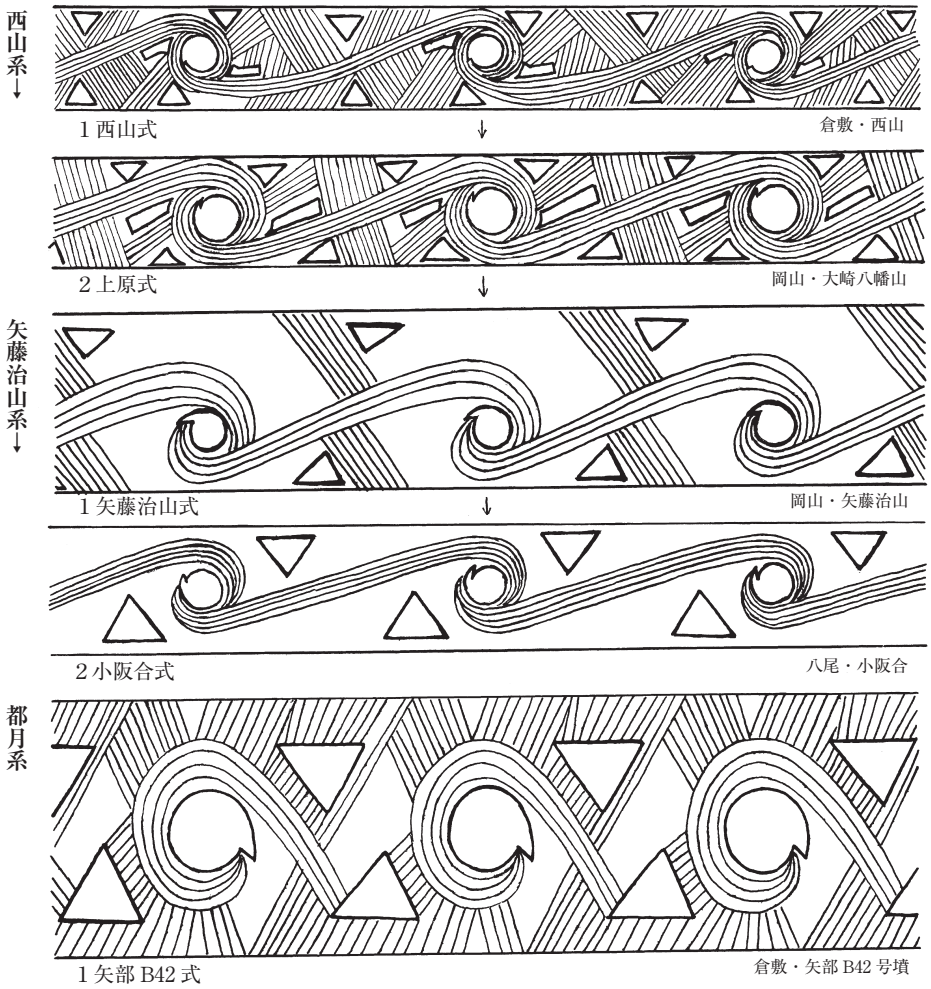


図 14　矢藤治山系特殊器台の文様の成立と変遷

❹……後期特殊器台の意義

1　後期特殊器台3系列の併行関係

後期特殊器台には3系列あり，それらは中期特殊器台の西山系から分岐したものである。しかし，現在知られている型式からすると，分岐の時期にズレがある。向木見系最古の矢部南向式は，西山系の上原式を経ることなく，西山式から直接由来している。もちろん，このばあいも上原式と併行する未知の型式が存在する可能性も否定はできない。それに対して，宮山系最古の西江1式は，上原式の後をうけて成立した型式である。そして，矢藤治山式は，向木見式の器形と上原式の文様に由来している。

3系列間の関係を知るために必要なことは，異なる系列を構成するそれぞれの型式間の併行関係を，器形と文様構成から推定する作業である（図15）。

まず，宮山式と併行する向木見系は，どの型式であるかを検討しよう。宮山式の文様は，4条1単位の弧線帯3本ないし3.5本を併行させてS字形の連続渦文を構成している。隣接する単位との間隔はつまっているためにS字形の中間は曲がり，結果として躍動感をもつ弧帯文が生まれている。宮山式に先行する柳坪式では，隣接する単位間の間隔があいているために，S字形の中間は直線的であり，この躍動感はない。その一方，向木見系では，西江3式の文様は，2条1単位の弧線帯3本を併行に描いてS字形の弧帯文を構成しており，隣接する単位との間隔がつまっているためにS字形の中間は曲がり，もっとも躍動感をもつ弧帯文となっている。先行する西江2式の文様は，2条1単位の弧線帯2本を併行に描いてS字形の弧帯文を構成しているので，西江3式とくらべて宮山式との類似性を欠く。このように，弧線帯の本数，単位文様の間隔に起因する文様の概形の類似は，偶然の一致ではなく，系列を異にしながらも弧帯文を描く製作者同士はどこかで関連をもって変化していると理解し，宮山式は西江3式と併行関係にあると私は推定する。

宮山式と西江3式との併行関係が認められるならば，向木見式はおそらく大和の弁天塚式とほぼ併行する時期までくだり，向木見式よりも宮山式のほうが古い可能性があることになる。少なくとも，かつて考えたような向木見型から宮山型への変遷という図式で特殊器台の変遷を説明する考えは通用しなくなったと判断せざるをえない。吉備地方では，宮山式の後まで向木見系特殊器台の製作をおこなっているとすれば，特殊器台の終焉についても，改めて深い考察を必要とする。向木見系には，西江3式まで特殊器台の脚部裾に鋸歯文を施しており，また特殊壺の口縁帯は向木見式まで垂直に近く立ち上がり，朝顔形に大きく開くことはない。これらの特徴を宮山系では早く失っており，向木見系は保守的な外観を最後まで保っていると理解することができる。矢藤治山式の特殊壺は，下胴部の外面をヘラ削りしており，その点は向木見式を継承している。口縁部が朝顔形に大きく開くところは宮山式よりも著しく，新しい要素といえる。私は，向木見系特殊器台と宮山系特殊器台との年代関係を次のように位置づける。ただし，各型式の時間幅がわからないので，向木見式，弁天塚式，矢藤治山式，都月系埴輪の最古型式との前後・併行関係については流動的である。

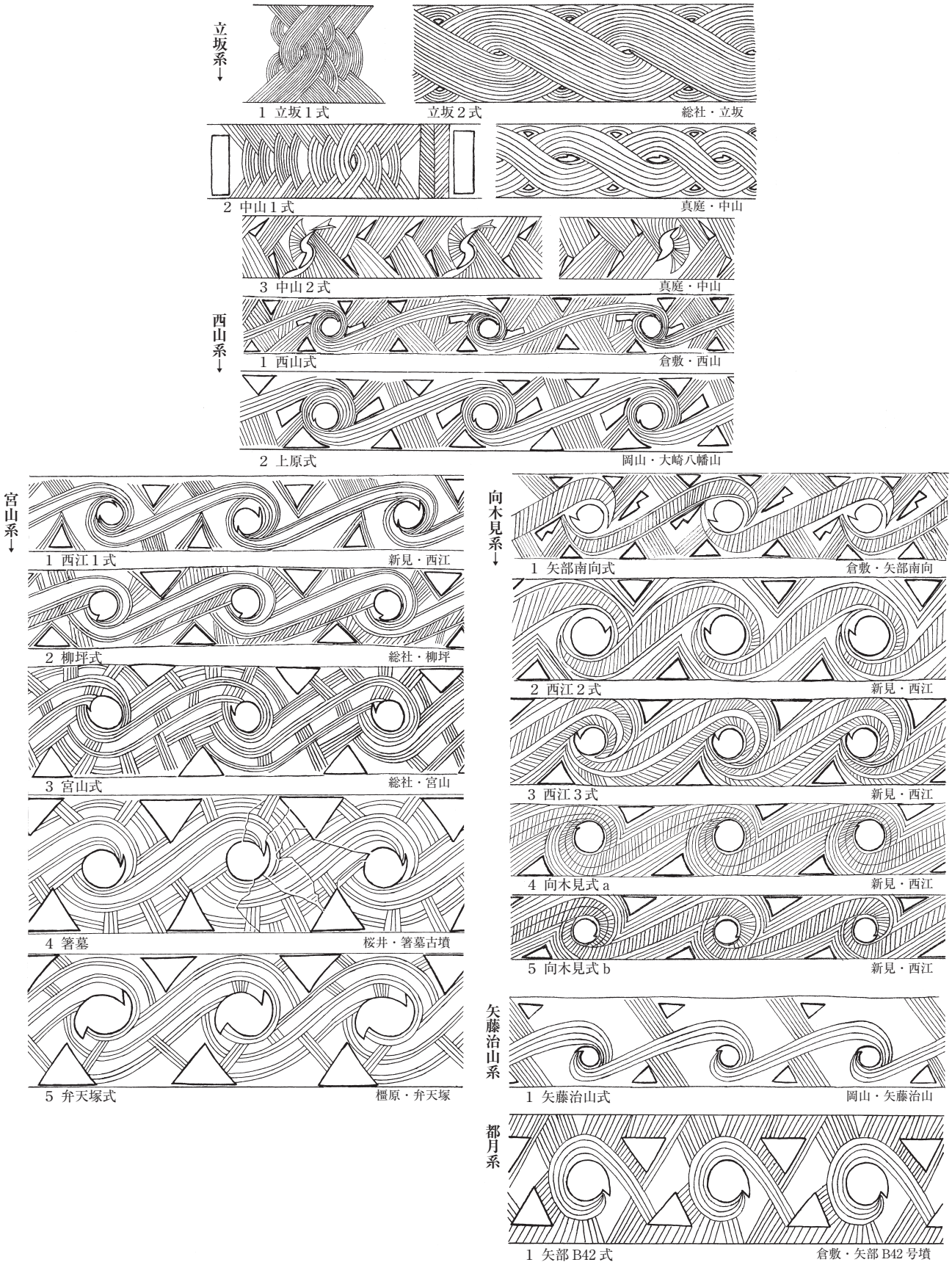
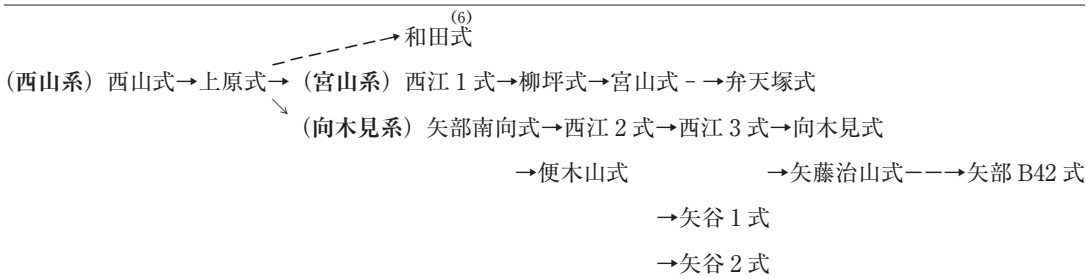


図15　前期～後期特殊器台の文様の変遷

宮山系と向木見系以下の諸型式間の併行関係は，この図には示していない。



2　後期特殊器台3系列の基盤地域

宮山系と向木見系の特殊器台は，唯一つの西山系から分岐して成立し，矢藤治山系の器形は向木見系最後の向木見式から分岐し，文様は上原式に由来すると考えた。では，その背後にどのような動きがあったのだろうか。これまでに見つかっている特殊器台を，系列・型式ごとに分けて列挙すると，以下の通りである。

（西山系）西山式：金敷寺裏山（井原市笹賀町），西山（倉敷市真備町，旧･吉備郡真備町），伊与部山（総社市下原），鯉喰神社（倉敷市矢部，旧･都窪郡庄村），矢谷（三次市東酒屋町），**上原式：**大崎八幡山（岡山市大崎，旧･吉備郡高松町），上原（津山市上横野），下道山（津山市小原），愛宕山（赤磐市吉井，旧･赤磐郡吉井町），馬口山（天理市兵庫町，問題があるがここにいれておく）

（宮山系）西江１式：西江（新見市哲西，旧・阿哲郡哲西町），皿丸山（津山市皿），**柳坪式：**柳坪（総社市三輪），**宮山式：**宮山（総社市三輪），中山大塚（天理市中山町），**弁天塚式：**弁天塚（橿原市葛本町），箸墓（桜井市箸中）

（向木見系）矢部南向式：矢部南向（倉敷市矢部，旧・都窪郡庄村），**西江２式：**西江（新見市哲西），矢谷（三次市東酒屋町），**西江３式：**西江（新見市哲西），山津田（総社市上林），**便木山式：**便木山（赤磐市山陽，旧・赤磐郡山陽町），**向木見式：**向木見（倉敷市木見，旧・児島郡郷内村），西山（倉敷市真備町，旧・吉備郡真備町），中山（真庭市落合，旧・真庭郡落合町），念仏寺山（真庭市新庄，旧・真庭郡新庄村），西江（新見市哲西），上原（津山市上横野），矢谷（三次市東酒屋町），便木山（赤磐市山陽，旧・赤磐郡山陽町），矢谷１式：矢谷（三次市東酒屋町），矢谷２式：矢谷（三次市東酒屋町），伊与部山（総社市下原），**型式不明：**秦山崎（総社市秦）

（矢藤治山系）矢藤治山式：矢藤治山（岡山市西花尻，旧・都窪郡庭瀬町），**小阪合式：**小阪合（大阪府八尾市若草町）

以上の諸遺跡のうち，付近で製作した可能性を現時点で考え得るのは，柳坪式・宮山式の総社東部地域，矢部南向式・矢藤治山式の足守川地域で，１型式が１遺跡でしか知られていないばあいである。西山系の上原式を出土した津山市上原遺跡のばあいは，胎土に大粒･多量の角閃石を混入し，間帯を例外的にナデ仕上げしている特徴から，付近で製作された可能性が高いと考える。

先行する西山式を出土している倉敷市西山遺跡と倉敷市鯉喰神社の西山式のばあいは，小田川地域で製作して足守川地域にもたらされたのか，それともその逆なのか，特殊器台の形態・文様の外見だけでは判断できない。

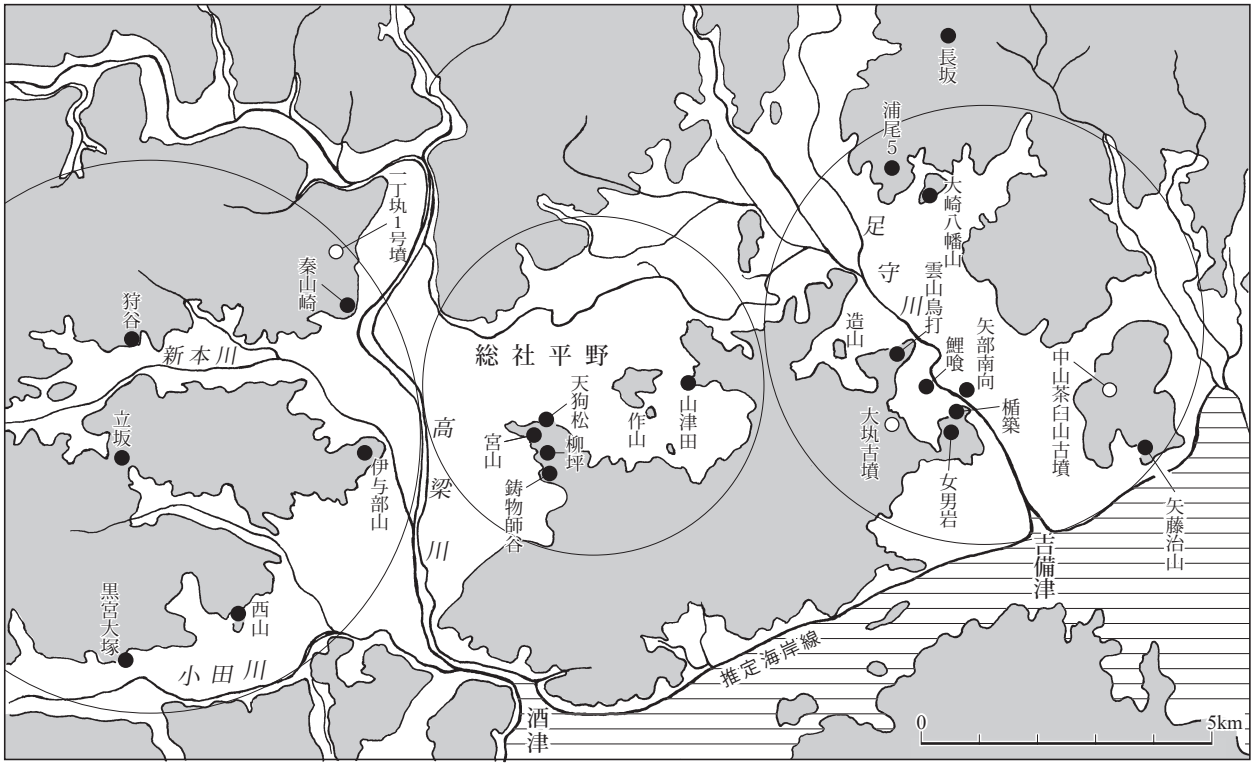


図 16　備中南部における特殊器台の３地域
金敷寺裏山墳丘墓は，地図の左外，小田川の東南岸，黒宮大塚の西 19.8 km の位置にある。

この問題に一つの解答を与えるのは，特殊器台の胎土である。特殊器台・特殊壺の胎土は独特の茶褐色を呈し，そのなかに角閃石・黒雲母の粒子を含んでおり，一見してそれと認識できることから，備中の特定の地域の粘土を使って製作した，と私は考えていた。しかし，分析結果によると，特殊器台はそれぞれの遺跡付近の日常土器の胎土と基本的に一致している一方，例えば西山遺跡と鯉喰神社墳丘墓から出土した西山式特殊器台の胎土は，化学特性が明らかに異なっており，製品が移動したのではなく，製作者が移動して出土地付近で製作したことを示唆している［中園ほか 2017］。製作者は，どこに移動してもその土地で粘土を得て，同じような外観をもつ特殊器台を作ったことになる。(7)

特殊器台と特殊壺は，集落で用いる日常土器と違い，特定の人物の死を契機にして製作した特別な土器である。私が設定する特殊器台の諸型式のうち，初期の貝ヶ原式，黒宮１式，同２式，前期の中山１式，後期の柳坪式はいずれも１個体であり，中山２式の３個体，宮山式の４個体は共通する特徴をもっている。柳坪遺跡は未発掘であるので，柳坪式は１個体しか存在しないのかどうかは明言できない。しかし，宮山式の４個体は動かない数字であろう。もし，柳坪式は将来とも１個体であれば，いうまでもなく製作者は１人である。宮山式の特殊器台４個体も弧帯文の特徴からすると同一人の製作である可能性が高い。このように，葬儀用の土器としての特殊器台のばあいは，１型式・1 個体・1 製作者であるばあいも想定しておかなければならない。特殊器台は，楯築，鯉喰神社，宮山，矢藤治山を別とすれば，１遺跡からの出土数は著しく少ない。西江遺跡では，墓地の一角に

4個体の特殊器台を立て，特殊壺をその上に載せてあったと復元されているが，4個体は4型式に分かれるので，4個体が並んでいるのは同時使用を意味するのではなく，葬儀終了後に片付ける場所を1個所に定めていたことを示している。これまでに出土した遺跡でのあり方から判断すると，中山，西江遺跡などでは，1人の葬儀に特殊器台・特殊壺各1個体を用いている。中山遺跡の中山1式1個体，同2式の3個体の計4個体は1人で，西江遺跡の西江1式1個体，西江2式，同3式，そして向木見式の計4個体は2人，多くても3人で製作したものであろう。そして矢谷墳丘墓では，西江1式，矢谷1式，矢谷2式，向木見式が各1個体出土しており，あまりにもばらばらの文様をほどこした個体の集合であるので，1個体1人で，何人かの人が時間をおいて製作した可能性を予想して，今後の検証結果を待ちたい。

しかしまた，同一製作者が連続する2型式を製作するばあいがあることも想定しておいたほうがよいだろう。向木見系特殊器台を例にとると，西江遺跡の向木見式の1個体は，第2文様帯には併行する2条のS字形の間を斜線でうめる単位文と，2条の間にもう1条をいれた単位文が共存し，第1文様帯はすべて3条のS字形を斜線でうめている。すなわち，1個体のうちに2型式の文様が共存して1型式を構成している。この個体の文様を描いていく過程で3条から2条へと遷移していき，次の個体では完全に2条のS字形になるのであろう。このばあい，3条と2条が別個体であれば，2型式に分類していたかもしれない。さらに，この遺跡の西江2式と同3式の型式差ははっきり認識できるけれども，同じ人が一定の時間をおいて製作した2型式・2個体であった可能性を否定できない。あるいは，西江遺跡の西江2式から向木見式までの3型式・3個体はすべて同一人によって，ある期間のうちに製作された可能性まで追究する必要がある[8]。特に，文様が型式学的にみて特別に飛躍的に変化することなくきわめてスムーズに変遷している事実は，同一の製作者が連続的にせよ，断続的にせよ，製作する過程で生じた多様化と簡略化の「定向進化」を想わせる。いずれにせよ，特殊器台の1型式をうみだす製作者は，1人，多くても2，3人ていどであって，ごく少数の者が独特の形態，文様，製作技術を修得し，その体系を代々伝承するような，特殊な環境のもとにあり，それは工人集団のような用語で言い表せない祭祀機構の一部であったと考えたほうがよいだろう。これらの点は，祭器として製作した銅鐸とも一部通じるところがある[9]。

中山1式・宮山式特殊器台の繁縟な文様，さらには弧帯石の繁縟で整然とした文様は，その文様の秘儀性をうかがわせ，誰でも描けるようなものではないことを明白に示している。それにしても，高さ1mを前後する大型の土器1個体を，たとえば5年に1度，突然，製作しようとしてもできるものではない。日常的に土器を製作していた人とまではいわなくても，土器製作に十分に習熟した人でなければ，特殊器台ほどの土器を製作できるとは思えない。文様が順を追って変遷しているあり方から，元図（粉本[10]）が存在したことは考えにくいとすれば，器形・文様に関する情報はすべてその製作者の頭のなかに納めてあったことになろう。特殊器台の文様を身につけている人は，特定の土器製作者にすぎなかったのか，それとも祭祀の面を掌握している祭司のような職掌の人物であったのか。あるいは，この地域を政治的に統率していた首長であったのか。この問題は今後の研究課題である。

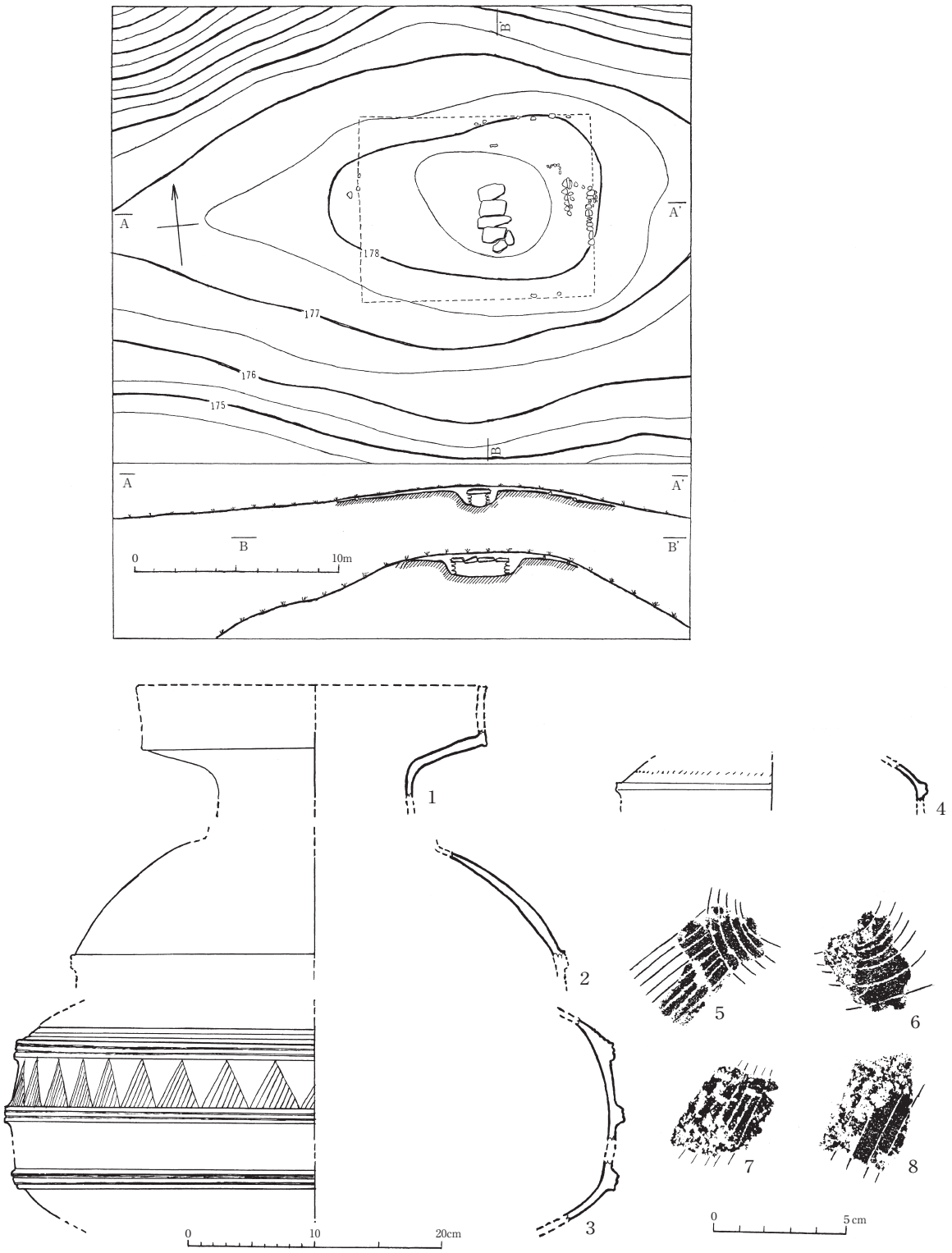


図 17　井原市金敷寺裏山墳丘墓の形状と出土した特殊器台・特殊壺（[間壁・間壁 1968] から作成）
墳丘は，地形からすると，西側に突出部があってもおかしくないが，確かな証拠はない。列石を二重にめぐらせている。竪穴式石槨に埋葬された北枕の被葬者は男性，特殊器台は西山式である。

3　後期特殊器台の評価

中期特殊器台の西山式の時期には，足守川と小田川の両地域は，特殊器台の統一型式を用いているから，一体の関係にあったと推定しうる。その特殊器台の製作者は足守川地域か，または小田川地域のどちらかにいて，他の地域におそらく一時的に移動して製作したと考えるのが妥当であろう。西山式の名祖遺跡である西山遺跡の特殊器台は，どこか近辺に転がっていた特殊器台の胴部を棺に利用したもので，元は墳丘墓に立っていた可能性はあるけれども，その墳丘墓がどこかはわからない。

西山遺跡の西21.9km，小田川中流域に所在する井原市笹賀町金敷寺裏山墳丘墓は，西山式特殊器台をもつ9×10～11mの長方形墳丘墓で，その中央に竪穴式石槨をもっていた（図17）。遺存していた人骨は，男性である［間壁・間壁1968］。小田川・新本川地域では，倉敷市黒宮墳丘墓，総社市立坂墳丘墓が知られており，足守川地域に比肩する有力者の墓を早くから築いている地域として，特殊器台の成立地域を考えるうえでも軽視できない。

その一方，立坂1式特殊器台と大小2個の弧帯石をもつ全長約80mの楯築墳丘墓に後続する西山式をもつ鯉喰神社は，推定全長60mの超大型墳丘墓であって（図18上）［近藤1992：248］，楯築墳丘墓の弧帯石を継承する弧帯石の破片も採集されている（図18-16）［平野・岸本2000］。ちなみに，楯築墳丘墓の中心被葬者は，棺の大きさ，棺内の朱の起伏とわずかに残存していた歯冠の破片から推定すると，身長約150cmの熟年女性である［春成2015：110］。この人物の生前の地位と性格が問題であるが，このころは足守川地域の鯉喰神社墳丘墓の被葬者が，小田川・新本川地域の有力者よりも，そして総社東部地域の有力者よりも優勢であって，足守川地域に西山式特殊器台を製作した人物の居住地を想定することは可能であろう。

西山系特殊器台が分岐するのは，上原式の後であって，この時期になると，以上の3地域に顕著な墳丘墓を見いだすことはできない。次に現れた特筆すべき墳丘墓は，総社東部地域では鋳物師谷1号墳丘墓と宮山墳丘墓，足守川地域では矢藤治山墳丘墓であって，いずれも竪穴式石槨をもち，中国鏡を副葬している。中期特殊器台の西山系から宮山系と向木見系が分岐したことは，葬儀時に顕れる特殊器台を統合の象徴的器物[(11)]とする備中南部の集団組織が，西山系の時期の後，総社東部地域と足守川地域に分裂し，その結果，それぞれの地域が独自の文様をもつ特殊器台の製作者をもつようになったことを意味する。

足守川地域では，楯築墳丘墓，鯉喰神社墳丘墓のあと，上原式を出土した大崎八幡神社遺跡は，墳丘の存在を確認できない遺跡である。女男岩遺跡は，特異な家形を載せた器台の出土によって著名である［間壁・間壁1974］。特殊器台の出土はなく，特殊壺は胴部に2本の突帯をめぐらせ，その間を斜格子文でうめた変則的な作りである。底部付近の外面にはヘラ削りはなく，胎土は日常土器と変わらない。土器は才ノ町1式であるから，矢部南向式特殊器台の時期である。遺構の遺存状態は悪いけれども，推定すると，周囲に溝をめぐらせた1辺約20mの低い墳丘の中央に木棺土坑墓をもつにすぎず，大型墳丘墓ではない。被葬者は「17～22歳，少なくとも25歳以前の男性」という。楯築－鯉喰神社の大型墳丘墓の系譜は，西山式までであって，その後は途絶えている。この頃に，備中南部に大きな政治的変動があり，足守川地域が一時的にも弱体化したことを暗示する。

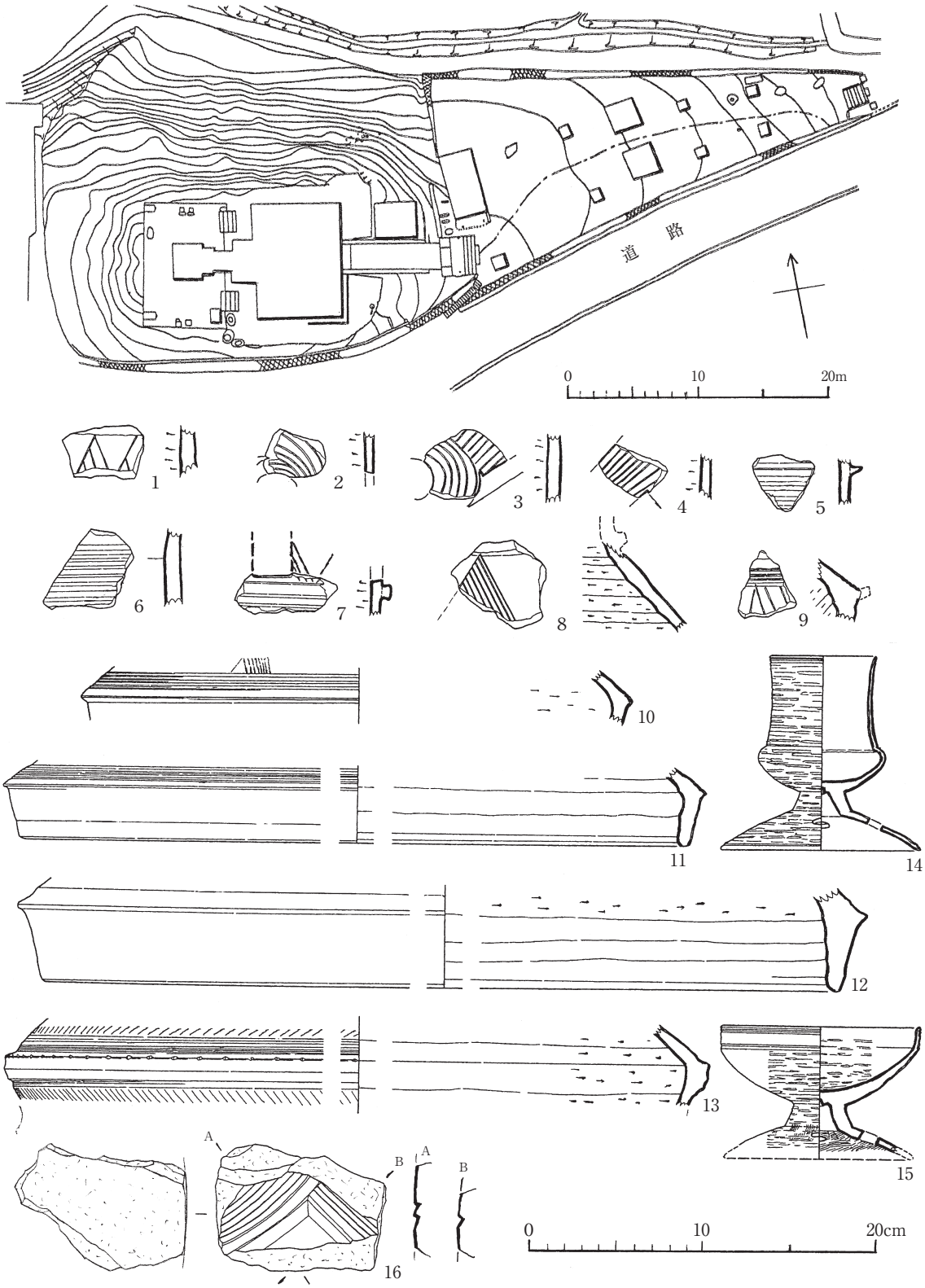


図 18　倉敷市鯉喰神社墳丘墓の現状［近藤ほか 1992］**と特殊器台・特殊壺・台付鉢と弧帯石**（［平野・岸本 2000］から作成）
左側の社殿がのっている長方形の高まりが墳丘で，大正時代に拝殿の改築を行なったさいに，長軸を南北方向においた竪穴式石槨 2 基が見つかったという。墳丘斜面での採集品には西山式特殊器台の小片と弧帯石の細片（16）がある。特殊器台の胴部文様には綾杉文の個所があり（7），裾部には鋸歯文を施している（8・10）。

小田川・新本川地域のばあいも同様に，初期～前期特殊器台を出土している黒宮大塚［間壁・間壁 1977］，立坂墳丘墓［近藤編 1996］を築いたあと，中期特殊器台の西山式の金敷寺裏山墳丘墓をのこして以降は顕著な墳丘墓が知られていない。

総社東部地域では，宮山系の特筆すべき墳丘墓は，宮山墳丘墓である。柳坪式を出土した墳丘墓は未発掘のため実態は不明である。ただし，この地域には宮山墳丘墓の近くに鋳物師谷１号墳丘墓という墳丘上面が削平されていたために特殊器台を見いだせなかった１辺約 20m の方形墳丘墓がある［春成ほか 1969］。板石を使った竪穴式石槨２基は，塊石を使った宮山墳丘墓の竪穴式石槨よりも，はるかに整然とした作りで，岡山市都月坂２号墳丘墓など，より古い時期の墳丘墓の石槨に類似している。また副葬の虺龍鏡は破砕して２個所に分散して置いた状態であって，完鏡を副葬した宮山墳丘墓よりも古い様相をもっている。小型の箱式石棺に伴った鉢形土器と高坏は才ノ町１式である。近接した鋳物師谷２号墳丘墓は，３基の竪穴式石槨墓をもつ特異な墳丘墓であったが［小野ほか 1977］，出土した特殊器台は前期の立坂１式であって，中・後期までくだることはない。このように，前期特殊器台の時期に備中では総社東部地域に特徴的な墳丘墓が出現している。ただし，墳丘墓はあくまでも被葬者の死をもって築造するものであり，特殊器台もまた被葬者の葬儀時に製作した器物であるから，被葬者の生前の活動は当然，特殊器台の型式・時期よりさかのぼる。宮山系と向木見系が併存していたときは，総社東部地域は足守川地域と拮抗する勢力であったといえば言い過ぎになるかもしれないが，対抗勢力であったことはまちがいないだろう。(12)

4　備中南部の2地域と他地域との関係

向木見系特殊器台は，広島県三次市矢谷，岡山県新見市西江，倉敷市西山，赤磐市便木山，津山市上原，倉敷市向木見と広く分布しているのが特徴である（図 19）。向木見系の分布が備中北部の山間部まで及んでいるのは，山陰地方に抜ける重要な交通路に面したそれぞれの小地域と足守川地域が，物資の流通と人の交流を契機として強い結びつきをもっていたからであろう。死後に特殊器台を供えられた被葬者は，向木見系のばあいは，足守川地域の集団出自の男性または女性であったと考えてみたい。

ただし，矢谷墳丘墓のばあいは，宮山系の西江１式のあと，向木見系の西江２式に変わり，そのあと西江３式から派生した矢谷１式，同２式へと変容する。その間，地元産の壺や鼓形器台を伴っているので，被葬者と備中南部との関係に濃淡があったと考えるほかない。墳丘墓として顕著な矢谷墳丘墓（図 7）は，備後北部から山陰地方に分布する四隅突出型墳丘墓であって，長さ 18.5m の前方後方形の墳丘をもち，出土した土器も地元産と備中系の両者からなり，備後北部と備中のそれぞれの象徴を備えた両属的な性格が顕著にあらわれている。しかし，こと葬儀用の土器に関しては備中系の特殊器台と特殊壺が，圧倒的な存在感を誇示しているかのようである。現状では，備中南部では向木見系の良好な遺跡に恵まれていない。それに対して，宮山系は備中での分布はきわめて限られているけれども，大和の大型墳丘墓と巨大古墳から出土している事実は，特殊器台を吉備地方の象徴的器物とみるかぎり，特に重視すべきである。

その一方，向木見系特殊器台から分岐した矢藤治山系特殊器台は，向木見式の器形を継承しながら，向木見系に伝統的な口縁帯と間帯に板描き凹線文はなく，胴部文様は向木見系を引きつかず，

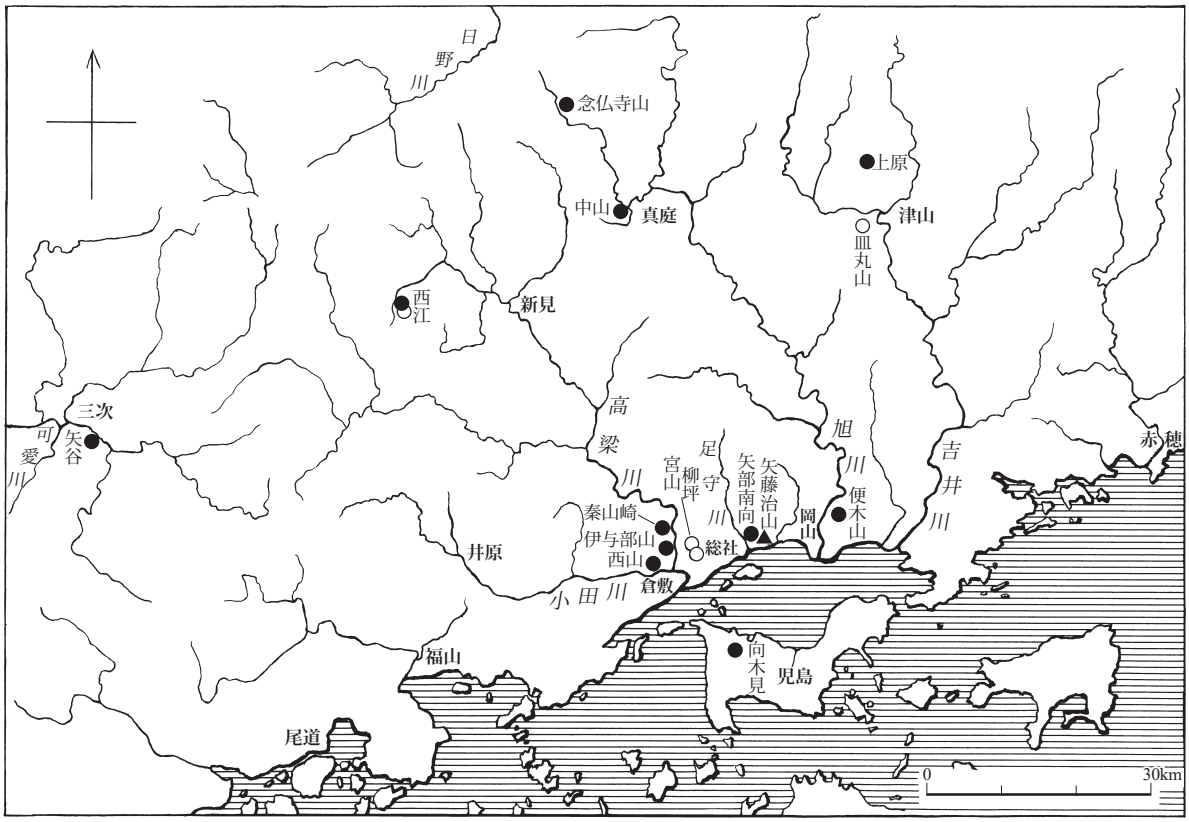


図 19　後期特殊器台 3 系列の分布図（●向木見系　○宮山系　▲矢藤治山式）

さかのぼって上原式の文様を採用して簡略化したものである。特殊壺も口縁帯と頸部の板描き凹線文を失っている。すなわち，矢藤治山系は向木見系の伝統を引き継ぎながら，文様だけは分岐前の西山系を採用して成立した系列で，しかも備中南部では 1 型式の存在が知られているだけである。向木見系は，矢部南向式以来，向木見式にいたるまで，型式変化が小さく伝統を保守する傾向をもっているが，矢藤治山系の成立によってその伝統は断ち切られたわけである。矢藤治山式の胴部文様が西山系に回帰した背景には，備中南部の集団間関係に大きな変動，つまり集団組織の再統合があったことを予想させる。

矢藤治山墳丘墓は，長さ 12 m の撥形の突出部をもつ墳丘長 36 m の前方後円形を呈し（図 12），竪穴式石槨内に小型の方格規矩鏡（径 16.4 cm，岡村編年の漢鏡 5 期［岡村 1993：47］）を破砕して副葬していた。この墳丘墓は，同じ足守川をはさんで楯築－鯉喰神社の大型墳丘墓が所在する「王墓の丘」矢部丘陵の反対側にある「王墓の山」と呼ぶべき吉備中山に所在する。吉備中山にはその後，墳丘長が 100 m を超える中山茶臼山（105 m，中山茶臼山式埴輪，三角縁四神四獣鏡を副葬），尾上車山（ギリギリ山）古墳（110 m，「普通」円筒埴輪，衣笠形埴輪出土）が築造されている一方，矢部丘陵には大坑（おおぐろ）古墳（墳丘長 47 m，七つ坑式埴輪，陪葬の小石槨から小型鏡と鉄剣を出土）が築造されているけれども，その後は続かない。しかも，大坑古墳の規模は同時期では大きくはない。矢藤治山墳丘

墓がこれまでの伝統的な墳墓の地である矢部丘陵から離れて吉備中山に移ったのは，深い理由が隠されているのであろう。矢藤治山式もまた，矢藤治山墳丘墓においてのみ見つかっており，宮山系の吉備地方での最終型式である宮山式のあり方と共通する。宮山墳丘墓が所在する三輪山では，宮山墳丘墓のあと，都月系円筒埴輪の時期の1，2世代分の首長墳を欠いたあと，天望台古墳（55m，壺形・円筒？・家形？埴輪出土），三笠山古墳（66m，円筒・壺形？・家形埴輪出土）が築造されている。

こうしてみると，備中南部では，矢藤治山墳丘墓の被葬者の生前に対立競合する関係にあった足守川地域と総社東部地域が，足守川地域主導のもとに再統合したとみることができる。しかし，大和東南部では宮山式を継承する弁天塚式が弁天塚「古墳」［奈良県立橿原考古学研究所編 1996］と箸墓古墳［丸山 1987，春成 2018］から出土している一方，向木見系を出土した墳丘墓または古墳は知られていない。この事実は，備中の2地域が対立していた時期に，総社東部地域は大和東南部との関係を構築し，その効果があがっていたことを示しているのだろうか。しかし，箸墓古墳では向木見式から矢藤治山式を経て成立した都月系埴輪が出土し［中村・笠野 1976，徳田・清喜 2000］，しかもこれが主体となっている。弁天塚式特殊器台と箸墓式埴輪が同一古墳の後円部頂にたてられていたという一つの事実から，両者が同時共存していたと理解してよければ［春成 2018］，箸墓古墳における都月系埴輪の優位は，足守川地域が総社東部地域よりも優勢であったことを意味しているのであろう。そして，弁天塚「古墳」では弁天塚式特殊器台が主体になっている事実は，その被葬者が総社東部地域と深い関係をもっていたことを示唆している。箸墓古墳と弁天塚「古墳」の被葬者の出自と被葬者同士の生前の関係があらためて問題となろう。

弥生時代後期末の備中南部の勢力は，前・中期特殊器台の楯築・鯉喰神社の大型墳丘墓の時期にくらべると衰退している。ところが，向木見系の分布は備中南部から備後の山間部まで及んでおり，宮山系のそれよりもはるかに広い。大和地方との関係が深くなるのはこの時期であって，弁天塚と箸墓古墳から出土している特殊器台は，宮山系の最後に位置する弁天塚式である。さきに特殊器台の製作者は1，2人と推定したが，その人物は大和に移動したあと，総社東部地域に帰還して特殊器台を製作したという証拠をのこしていない。総社東部地域から宮山系特殊器台の後続型式が大和に移ってしまった，すなわち宮山系の象徴が大和に移ったということは，それを象徴として祭祀する人が大和に移動してしまったことを意味する。しかし，箸墓古墳からは，都月系円筒埴輪がかなりの量，弁天塚「古墳」からも都月系円筒埴輪がごく少量出土している。楯築墳丘墓以来の社会的伝統をもつ足守川地域の勢威が復活したのは，総社東部地域の勢威が衰退したという備中南部における政治的変動が存在したからではないだろうか。

これは，備前に出現した浦間茶臼山古墳（140m，都月系埴輪，細線獣帯鏡出土），網浜茶臼山古墳（92m，都月系埴輪出土），平井西山古墳（操山109号墳，76m，都月系埴輪，三角縁神獣鏡など8面出土）などの都月系埴輪をもつ大型前方後円墳の系譜についても，旭川東部の在地勢力が成長してのこした古墳なのか，それとも備中の足守川地域勢力が進出・拡大してのこしたと考えるのかの問題とも関係する。浦間茶臼山古墳は，旭東平野の東はずれ，吉井川の流れに近い同平野の入口に築かれており，備前・備中南部のかつての特殊器台の主要分布地域に侵入しようとする外敵を，巨大古墳に埋葬された有力者の霊力によって守護しようとする築造者たちのつよい意図を感じさせる占地とみることもできるからである。浦間茶臼山古墳は明瞭な古墳群を形成しておらず，大和の箸墓古墳や

西殿塚古墳のばあいとはまた違った意味で，重大な問題をかかえている。

以上，特殊器台の向木見系と矢藤治山系を設定して，さきに発表した宮山系と合わせて後期特殊器台の３系列の意味と系列間の相互関係について考察した。そのうえで，前方後円墳が出現する直前の備中の状況を垣間見た。これを，今日では通説化した観のある半世紀前の編年案［近藤・春成 1967］とくらべると，①向木見型特殊器台と宮山型特殊器台は系列を異にする同時併存の関係にあると理解したので，向木見型から宮山型への変遷を否定したことになる。そして，②向木見型を部分的に継承した矢藤治山式特殊器台から都月型埴輪は誕生したと展望したので，宮山型特殊器台から都月型埴輪への転換も否定したことになる。すなわち，③円筒埴輪成立へのおおよその道筋は，立坂系→西山系→向木見系→矢藤治山系→都月系であり，その動きの中心は足守川地域にあった，④宮山系は西山系の上原式を受け継いだ総社東部地域の系列であって，円筒埴輪成立の道筋からは外れた傍系であったけれども，宮山系最後の弁天塚式は大和の巨大古墳にのみたてられた，というのが新たな仮説である。

備中南部で生成した宮山系特殊器台と都月系円筒埴輪は，奈良盆地東南部に所在する日本列島で最古最大の前方後円墳，箸墓古墳と西殿塚古墳からも出土している。特殊器台と初期埴輪が内包する問題は，両古墳の被葬者と備中・備前との関係，ひいては初期倭政権の成立過程で吉備勢力が果たした役割を解明していくうえで重要な位置を占めている[(13)]［春成 2018］。都月系円筒埴輪の成立と拡散の問題については，特殊器台の生成過程を明らかにしたうえで論じることにしたい。

謝辞

本研究にあたって，関係資料の調査等でお世話くださった植田千佳穂・下津間康夫・和田麻衣子（以上，当時広島県立歴史民俗資料館），扇崎由・安川満（岡山市埋蔵文化財センター），岡戸哲紀（大阪府文化財センター），加藤光臣（元広島県教育委員会），佐藤寛介（岡山県立博物館），高橋護（元ノートルダム清心女子大学），福本明・藤原憲芳（当時，倉敷市教育委員会），水田貴士（浅口市教育委員会），物部茂樹・高田恭一郎・河合忍（岡山県古代吉備文化財センター），金田善敬・伴祐子（当時，赤磐市古代資料館），中園聡・平川ひろみ・太郎良真妃・若松花帆（以上，鹿児島国際大学），田崎博之（愛媛大学法文学部），平井典子（総社市文化財学習の館），丸山竜平（当時，滋賀県教育委員会）の諸氏，および適切な指摘を寄せていただいた査読者に対して深い謝意をあらわす。

註

（１）――向木見遺跡出土の特殊器台の実測図が発表されたのは，宮山遺跡で特殊器台の全形が知られた後の 1966 年のことで，高橋護が作成した図である（図 3-12，図 4-7）［鎌木 1966：334］。宮山の特殊器台を参考にして，文様帯 3，間帯 4 と復元しているが，現在の知識でいうと，文様帯 4，間帯 5 が正しいだろう。

（２）――西山系から宮山系，向木見系，矢藤治山系の「弧帯文」は，佐原真の定義ではすべて「連続渦文ＳＩ種」である［佐原 2002：239-240］。つまり，Ｓ字形の渦文の単位文が独立性を保ち，渦の中心同士がいったん切れて不完全なつながり方をしている。これは１条の線で描いているので「弧帯文」とは呼べないが，原理は同じである。その一方，楯築墳丘墓の弧帯石の文様は，渦は確かに認められるが，「渦文」とは呼べない。立坂墳丘墓の特殊器台の胴部文様も渦文とはいえない。しかし，大きな目で見れば「弧帯文」である。「複合鋸歯

文」を参考にして，あえて呼べば複合波文，簡略化すれば複波文であるが，複波文の用語はすでに三角縁神獣鏡外区の文様をあらわすのに使われている。その形態は2条の線で鋸歯文を連続的に描いた文様であって，特殊器台の文様とはまったく異なる。そこで，特殊器台，弧帯石の文様の総称としては弧帯文を使い，立坂系特殊器台の弧帯文を複合波文，西山系特殊器台などの弧帯文を，連続渦文，簡略化して連渦文と呼び分けるのも一つの便法である。この問題は，弧帯文の起原を何に求めるかともかかわっており，現時点で，呼称にこだわりすぎるのも得策でない［春成2002：290］。なお，吉備地方で連続渦文のもっとも良好な例は，倉敷市由加山蓮台寺出土の平型銅剣の身の文様である。ただし，この例は1条の線で描いているので，4～5条の線を束ねて描いた西山式の例と同視することはできない。

（3）――矢谷墳丘墓の特殊器台6［金井・小都編1981：第30図28］の文様帯は，報告書の展開図と，破片の実物とをくらべると，復元の一部に間違いが認められる。連続渦文は4条1単位であって，文様1単位の長さは22cmと長い。渦文の上下の斜線文は逆N字形とN字形で，透孔は文様1単位につき巴形1，逆三角形2，三角形2，矢印形2の計7つあけてある。これらの特徴は，さきに設定した西山式とほぼ一致する。

（4）――墓地ではなく，集落跡から特殊器台が見つかった代表的な遺跡に，倉敷市矢部南向（矢部南向式），倉敷市矢部伊能軒（都月系埴輪），岡山市津寺・加茂小学校（立坂1式），岡山市津島遺跡（西江3式）をあげることができる。それらのなかには焼成失敗品を廃棄した例を含んでいる可能性を，田崎博之の研究は示唆している［田崎2004：70，Pl.99］。特殊器台は集落の内外での祭祀にも用いたとする解釈もある［宇垣2016：37-38］が，基本的に特定個人の葬送儀礼との関連がつよい，と私は考えている。

（5）――都月系円筒埴輪の細分を試みた古市秀治は，矢部B42号墳・矢部堀越遺跡と箸墓古墳から出土した埴輪を最古段階に位置づけ，さらに，箸墓古墳のそれは「やや新しい様相を示し」，「古い様相のものは備中の足守川周辺から出土している」と正しく指摘している［古市1996：67-70］。箸墓古墳の埴輪の文様は，矢部B42号墳と矢部堀越遺跡のそれよりも簡略化が進んでいるので，私のいう矢部B42式は箸墓式よりも1型式は古い［春成2015：101］。現状では，都月系の最古型式は矢部B42号墳出土の矢部B42式であり，それは足守川地域で見つかっているので，都月系円筒埴輪の誕生を箸墓古墳の成立とただちに結びつけることはできない。都月系円筒埴輪の成立については，新たな解釈が必要である。

（6）――宮山系特殊器台を論じる際に取りあげておくべきであった和田式について記載しておきたい。

和田式

岡山県浅口市鴨方町和田遺跡B調査区の1号土坑墓（木棺墓）の埋土上部から発掘された特殊器台3個体分のうち脚部を含む2個体にもとづいて設定する型式である（図20）。和田式に伴う特殊壺は明らかでない。1979年に山陽自動車道建設に先立つ発掘で，岡山県教育委員会が調査した［伊藤ほか1981，浅口市教育委員会蔵］。

形態・大きさ　脚部から第1文様帯の半ばまでの破片がもっとも大きいので，文様帯，間帯の構成は不明である。脚部の裾から台に移る屈折部は裾が台におおいかぶさるように作っている。特殊器台2は，第1文様幅復元9.0cm，第1間帯幅7.4cm，脚部裾幅5.7cm，台高さ3.4cm，間帯の幅と文様帯の幅との割合は1：1.21である。胎土は，暗褐色で，足守川地域の特殊器台と明らかに区別される。他の破片も，明赤褐色で，通常の特殊器台と異なる。この他に報告者が「搬入品」とした特殊器台は，西江3式や縦区画内に斜線文をもつ細片である。

文様　胴部文様はS字の下端を切断した形の蕨手文で，10条からなる渦から斜め左下に向かって伸ばした8条の弧線で，それが次の渦文に連絡している。蕨手文の上の空間は左下がりの多条斜線でうめつくし，右下は右下がりの多条斜線でうめつくしている。透孔は，渦の中心はおそらく巴形，渦の左上と右下に弧を上にした扇形にあけており，文様1単位につき3個所である。1単位文様の長さ16.8cm。間帯は板描き凹線文で4条/1cmである。

脚部の裾は，特殊器台1は無文，特殊器台2は裾の端に5条の板描き凹線文をめぐらしているが，ともに鋸歯文を施していない。内面の裾端から上は縦方向にヘラ削りして薄く仕上げており，その厚さは7mmにすぎない。

和田式の文様は変形の度が著しい。多条の弧線で連続渦文を描き，上下の空間を多条の斜線でうめているという点で，その起源は西山系の上原式に求めることができる。脚部の裾から台への移行部の特徴は向木見式に近い。向木見系は向木見式まで脚部裾に板描き凹線文をもつのに対して，宮山系では柳坪式-宮山式には，それがない。また，宮山式の間帯は，縦板目のあとナデ仕上げであって，板描き凹線文ではないので，宮山

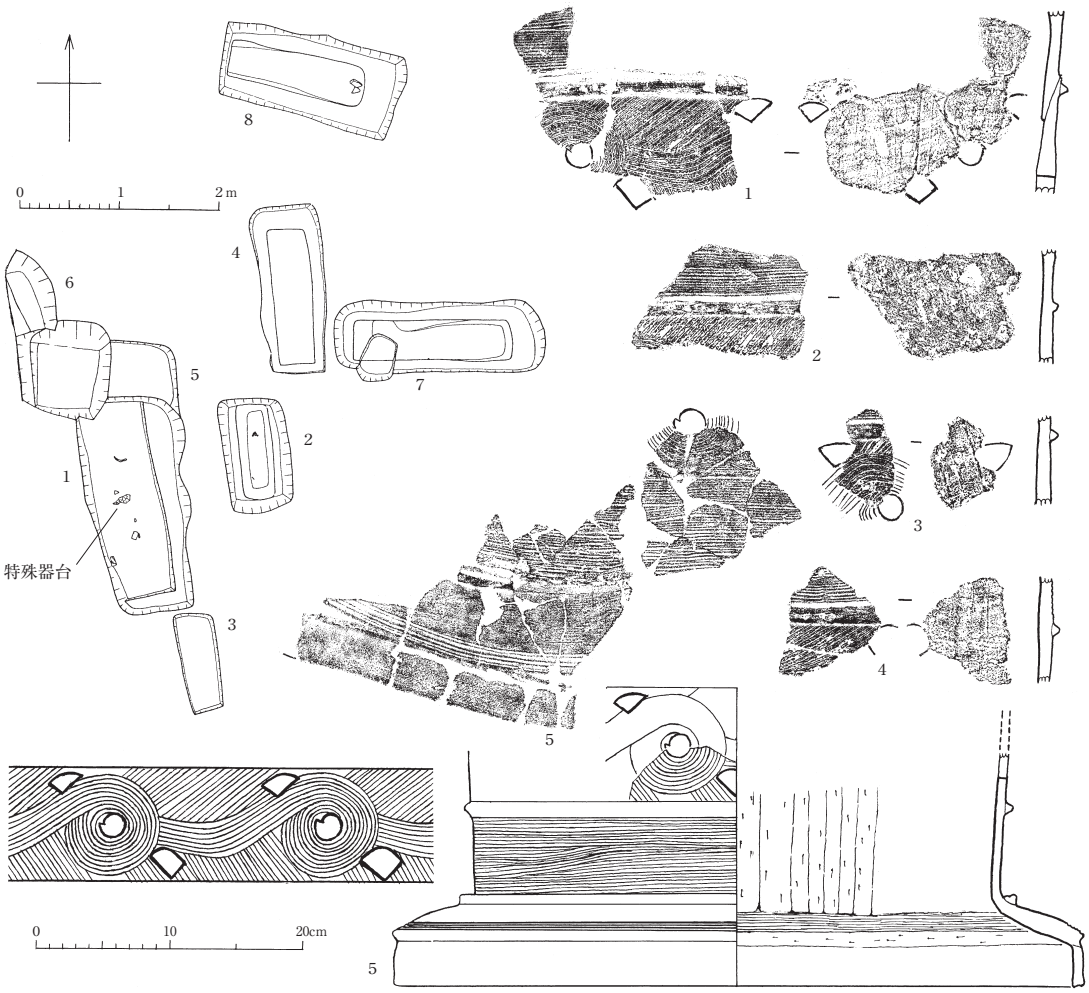


図 20　浅口市和田遺跡の土坑墓と1号墓から出土した和田式特殊器台と胴部文様の復元

式をモデルにして製作したと考えることはできない。脚部の裾から台への移行部の特徴は向木見式に近い。裾の鋸歯文を失っているのは向木見系では西江３式よりも新しい要素である。しかし，西山系では上原式が鋸歯文をもっていないようであるから，上原式の変形とみて，その時期は向木見式に近いところにおきたい。

さらに，同論文に図示できなかった総社市宮山遺跡の特殊器台５(北６)の胴部小破片２点（岡山県立博物館蔵）について，その後，調査することができたので，不備を補っておく（図21)。特殊器台５・６は作りが悪く，同１～４とは製作者が異なると推測した個体である。しかし，５の弧帯文の意匠は１～４と変わるところはない。

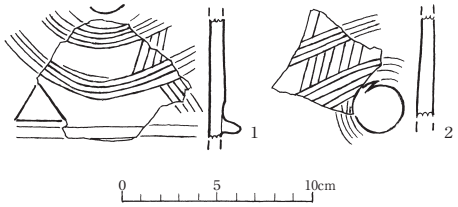


図 21　総社市宮山墳丘墓円丘北裾出土の特殊器台

（7）――特殊器台の胎土の問題は，現在，中園聡らと共同研究を進めている。現段階での見解は，すでに発表しておいたが［中園ほか2017］，その後の研究でも同様の結果となっている。

（8）――アンリ・マティスが1935年に連作した裸婦の絵22枚は，いくつかの型式に分類できるが，そのうちの数点をバラバラの状態で示されたばあい，同一人の作と断定することは困難であろう。パブロ・ピカソが，1945-46年に連作した牡牛のデッサン数十点［佐原・春成1997：151］は，まったく変わらぬ対象を具象から抽象に向かって描いており，型式分類もできるけれども，同一人の作である。その一方，ピカソが得意とした「剽窃」は，ウジェーヌ・ドラクロワなど他の画家の作品を題材にして自己流に描いたもので［高階1964］，構図は同じであるが，このばあいは，画家は異なる。考古資料でいうと，中国鏡と倣製鏡の関係に相当する。特殊器台がかかえるこの問題の解明は，土器製作者の個人を識別する方法（板描き凹線文の痕跡，個人の癖など）に取り組んでいる中園聡らの研究に期待することにしたい。

（9）――神戸市生駒銅鐸（扁平鈕2式）と三重県笹野蔵銅鐸（突線鈕2式）の6区袈裟襷文銅鐸は，連続渦文の正確さ，鋳造技術，表面仕上げなど，銅鐸のなかで最高の出来栄えを示す2点であるが，斜格子文の右下がり・左下がりの角度からすると，工人はともに左利きであって，同一人が2型式の銅鐸を製作した可能性がある1例である。

(10)――「粉本」については，岡山市津島遺跡（河道1）で発掘されているような文様を彫刻した木板［島崎ほか編2003：284-286］のほか，葬儀後に遺跡にのこした特殊器台が一種の粉本になる可能性はある。また，弥生後期の龍の絵画土器は，しばしばその小破片のなかに龍の図像がほぼのこっている［春成2011：288-290］ので，このような形で文様や図像の保存がありえたことを示唆している。岡山市加茂A遺跡では，住居内にのこっていた龍の絵画土器片だけは共伴した他の土器の時期より1型式古いものであった。

(11)――特殊器台や都月系埴輪は，あくまでも吉備を象徴する物実であって，真の象徴は楯築墳丘墓の弧帯石であって，この石造品は人頭龍身の吉備の祖先神をあらわし，これが備中勢力統合の象徴的器物すなわち神体であり，同時にこれを祀る者が生きた象徴にもなっていた，と私は考える［春成2015］。

(12)――総社東部地域と足守川地域の勢力は，それぞれ完全に独立・完結した集団で，両勢力間は敵対的な関係にあり，時としては武器をとっての戦いが存在したとまで想定する必要はないけれども，勢力が一時的にも二分していたことは確かであろう。なお，双方は排他的な通婚関係で結ばれ，共通の祖先を祭るような機会には大規模な祭祀や儀礼的な対抗戦をおこなうような双分制の社会を構成して可能性も考えておきたい。古文献では，応神から武烈までの11人の天皇は，葛城氏から4人と和邇氏から6人の女性を后妃に迎えている。布村一夫は，アマツカミ系の男がクニツカミ系の女を娶らなければならないという婚姻規律が応神系列の大王家にあったことを推測している［布村1973：319-325］。

(13)――「宮山型」特殊器台が吉備地方では小規模の宮山墳丘墓から見つかっているだけであるのに対して，大和の箸墓古墳や西殿塚古墳などから出土している事実について，近藤義郎は大略，つぎのように論じている。①特殊器台・特殊壺は，吉備では首長の埋葬祭祀に欠かせない呪具で，墓上・墳頂において首長埋葬を示すもっとも重要な標識であった。②吉備では，弥生墳丘墓から初期前方後円墳への過程をたどることができるが，備中では楯築，鯉喰神社の両大型墳丘墓から矢部大坑古墳のような小型前方後円墳に遷移する一方，備前には浦間茶臼山古墳のような大型前方後円墳が出現しており，備中勢力の衰退が著しい。③大和を中心に河内・摂津・山城などの地域では，大和の石塚やホケノ山など纒向墳墓群も含めて箸墓古墳という最古の超大型前方後円墳の創出にいたる過程を示す証拠がない。④そこで，備中の主要勢力が大和に移動して前方後円墳を初めて築いた，と［近藤2001：96-99］。

特殊器台を重要な根拠にして，前方後円墳の成立に備中勢力がつよくかかわっているとする構想は，私も同意見である。しかし，特殊器台の細かな編年をおこなわずに宮山墳丘墓や纒向墳丘墓群を箸墓古墳と同時期またはそれ以後とみなし，宮山や矢藤治山の墳丘墓を古墳と呼び変えて展開する議論は性急にすぎる。この問題は，遺物・遺跡の型式学的な分析を徹底的におこなったうえで論じるべきである，と私は考える。

文献

朝倉秀昭　1993「矢部堀越遺跡」『山陽自動車道発掘調査報告書』6，岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 82，岡山県教育委員会。

伊藤　晃・朝倉秀昭・江見正巳　1981『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』2，浅口郡鴨方町，岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 42，岡山県教育委員会。

井上　弘　1993「矢部古墳群 B 地区 42 号墳」『山陽自動車道発掘調査報告書』6，岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 82，岡山県教育委員会。

上田　舒　1959「埴輪の諸問題」（小林行雄編）『世界考古学大系』3，日本Ⅲ，古墳時代，157-163 頁，平凡社。

宇垣匡雅　1981「特殊器台形土器・特殊壺形土器に関する型式学的研究」『考古学研究』第 27 巻第 4 号，55-72 頁。

宇垣匡雅　2013「特殊器台･特殊器台形埴輪編年に関する一考察」『日本考古学』第 36 号，1-14 頁，日本考古学協会。

宇垣匡雅　2016「特殊器台祭祀の性格とその普及」『古代吉備』第 27 集，36-57 頁。

宇垣匡雅･古市秀治･乗岡　実 1992「集成 2　特殊器台･特殊壺」（近藤義郎編）『吉備の考古学的研究』上，493-517 頁，山陽新聞社。

岡村秀典　1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 55 集，39-83 頁。

奥　和之編　1989『東郷遺跡発掘調査概報』Ⅰ，大阪府教育委員会。

小野一臣・間壁忠彦・間壁葭子　1977「岡山県清音村鋳物師谷 2 号墳出土の土器」『倉敷考古館研究集報』第 13 号，56-69 頁。

加藤光臣　1996「矢谷弥生墳墓群（国史跡「矢谷古墳」）の歴史的意義」『芸備』第 39 集，1-10 頁，芸備友の会。

金井亀喜・小都　隆編　1981『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター。

鎌木義昌　1966「祭祀と信仰」『弥生時代』日本の考古学Ⅲ，327-348 頁，河出書房。

狐塚省蔵　1977「岡山県吉井町あたご山遺跡出土の“器台・壺”」『考古学雑誌』第 63 巻第 3 号，275-282 頁。

草原孝典編　1999『長坂古墳群』岡山市教育委員会。

神原英朗　1971『便木山遺跡発掘調査報告・惣図遺跡発掘調査概報・岩田第 3･5 号墳発掘調査概報』岡山県営山陽新市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報 2，山陽団地埋蔵文化財発掘調査団。

小林行雄　1959『古墳の話』岩波新書，青版 342，岩波書店。

小林行雄　1971「解説」（小林行雄編）『論集日本文化の起源』1，考古学，1-86 頁，平凡社。

小林行雄　1974『埴輪』陶磁大系，第 3 巻，平凡社。

K　1963「岡山県総社市宮山墳墓群の調査」『考古学研究』第 10 巻第 2 号，36 頁。（K は近藤の略号）

近藤義郎　1958「吉備国における埴輪の変遷」『古代吉備』第 2 集，1-9 頁。

近藤義郎　1966「弥生文化の発達と社会関係の変化」（和島誠一編）『弥生時代』日本の考古学Ⅲ，442-459 頁，河出書房新社。

近藤義郎　1977「古墳以前の墳丘墓」『岡山大学法文学部学術紀要』第 37 号（史学篇），1-21 頁。

近藤義郎　1980『楯築遺跡』山陽カラーシリーズ，3，山陽新聞社。

近藤義郎　1984「吉備の隆盛と衰退」『えとのす』第 25 号，37-38 頁，新日本教育図書。

近藤義郎　1986「上原遺跡」『岡山県史』第 18 巻，考古資料，158 頁，岡山県。

近藤義郎　1992「弥生墳丘墓」（近藤義郎編）『吉備の考古学的研究』上，237-257 頁，山陽新聞社。

近藤義郎編　1992『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会。

近藤義郎編　1995『岡山市矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団。

近藤義郎編　1996『伊与部山墳墓群』総社市文化振興財団。

近藤義郎編　1996『新本立坂』総社市文化振興財団。

近藤義郎　2001『前方後円墳と吉備・大和』吉備人出版。

近藤義郎・春成秀爾　1967「埴輪の起源」『考古学研究』第 13 巻第 3 号，13-35 頁。

近藤義郎・大橋雅也・扇崎　由 1992「集成 1　弥生墳丘墓」（近藤義郎編）『吉備の考古学的研究』上，483-491 頁，山陽新聞社。

佐原　真　2002「和歌山市有本出土銅鐸」『銅鐸の考古学』229-248 頁，東京大学出版会（初出は 1968『和歌山県文化財学術調査報告書』第 3 冊，61-85 頁，和歌山県教育委員会）。

佐原　真・春成秀爾　1997『原始絵画』歴史発掘 5，講談社。

島崎　東・岡本泰典・時實奈歩編（金田善敬）　2003『津島遺跡Ⅳ　岡山県陸上競技場改修に伴う発掘調査』岡山県

埋蔵文化財発掘調査報告173（第1分冊），河道1木製品，254-356頁，岡山県教育委員会。
白石太一郎・春成秀爾・杉山晋作・奥田　尚　1984「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集，41-80頁。
末永雅雄　1951「上代土器技術と生産転換」『考古学論攷』1-12頁，奈良県立橿原考古学研究所。
高階秀爾　1964『ピカソ―剽窃の論理―』筑摩書房。
高橋　護　1960「児島市向木見遺跡発見の二・三の遺物」『考古学手帖』第12号，4-5頁。
高橋　護　1963「三輪山墳墓群の調査から」『岡山県総合文化センター館報』第39号，6頁。
高橋　護　1986「組帯文の展開と特殊器台」『岡山県立博物館研究報告』第5号，1-27頁。
田崎博之　2004『土器焼成・石器製作残滓からみた弥生時代の分業と集団間交流システムの実証的研究』科学研究費補助金研究成果報告書，愛媛大学法文学部田崎研究室。
田仲満雄・正岡睦夫・二宮治夫　1977「西江遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査10』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20，岡山県教育委員会。
徳田誠志・清喜裕二　2000「倭迹迹日百襲姫命大市墓被害木処理事業（復旧）箇所の調査」『書陵部紀要』第51号，26-40頁。
中園　聡・平川ひろみ・太郎良真妃・若松花帆／春成秀爾　2017「宮山墳丘墓特殊器台の産地分析」『岡山県立博物館研究報告』第37号，後ろから29-34頁。
中村一郎・笠野　毅　1976「大市墓の出土品」『書陵部紀要』第27号，57-65頁。
奈良県立橿原考古学研究所編（中井一夫・豊岡卓之）　1996『中山大塚古墳　附篇　葛本弁天塚古墳・上の山古墳』奈良県立橿原考古学研究所調査報告，第82冊。
布村一夫　1973『日本神話学・神がみの結婚』教育文庫4，麦書房。
春成秀爾　2002「弧帯文」（田中琢・佐原真編集代表）『日本考古学事典』290頁，三省堂。
春成秀爾　2011「弥生時代の龍」『祭りと呪術の考古学』228-300頁，塙書房。
春成秀爾　2014「特殊器台と箸墓古墳」『第34回考古学研究会東京例会報告資料集』29-40頁，考古学研究会東京例会。
春成秀爾　2015「楯築墳丘墓から箸墓古墳へ」『国際学術研究会 交響する古代Ⅴ 予稿集』99-112頁，明治大学日本古代学研究所。
春成秀爾　2017「宮山系特殊器台の研究」『岡山県立博物館研究報告』第37号，後ろから1-26頁。
春成秀爾　2018「箸墓古墳の特殊器台と埴輪」『季刊考古学』第142号，99-106頁。
春成秀爾・葛原克人・小野一臣・中田啓司　1969「備中清音村鋳物師谷1号墳墓調査報告」『古代吉備』第6集，7-21頁。
平野泰司・岸本道昭　2000「鯉喰神社弥生墳丘墓の弧帯石と特殊器台・壺」『古代吉備』第22集，69-84頁。
福尾正彦　1990「平成元年度陵墓関係調査概要（衾田陵の墳丘調査）」『書陵部紀要』第42号，100-111頁。
古市秀治　1996「特殊器台形埴輪の研究」『考古学研究』第43巻第1号，55-76頁。
間壁忠彦・間壁葭子　1967「岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告」『倉敷考古館研究集報』第3号，21-50頁。
間壁忠彦・間壁葭子　1968「岡山県井原市金敷寺裏山古墳」倉敷考古館研究集報』第5号，29-39頁。
間壁忠彦・間壁葭子　1974「女男岩遺跡」『倉敷考古館研究集報』第10号，13-40頁。
間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司　1977「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号，1-55頁。
正岡睦夫・山磨康平・平井　勝　1979『西山遺跡』真備町教育委員会。
松下知代編　2005『小阪合遺跡（その3）』大阪府文化財センター調査報告書，第132集。
松本和男・江見正己　1995「足守川矢部南向遺跡」『足守川河川改修工事に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94，岡山県教育委員会。
丸山竜平　1987「巨大古墳の発生」『東アジアの古代文化』第52号，86-96頁。
水内昌康　1959「岡山市津島都月坂1号墳の発掘」『私たちの考古学』第5巻第3号（通巻19号），37頁，考古学研究会。
安川　満　1995「矢藤治山弥生墳丘墓出土特殊器台・特殊壺の特徴とその評価」（近藤義郎編）『岡山市矢藤治山弥生墳丘墓』80-86頁，矢藤治山弥生墳丘墓調査団。
山磨康平・奥　和之　1978『中山遺跡』落合町教育委員会。
横山浩一　1978「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』第23号（2003『古代技術史攷』3-30頁，岩波書店，所収）

（国立歴史民俗博物館名誉教授）

（2018年1月4日受付，2018年6月4日審査終了）

A Study on the Special Pedestal of the Mukogimi Series of Ancient Kibi Region in the Late Yayoi Period

HARUNARI Hideji

The special pedestal pottery developed in the Kibi Region in the latter half of the Late Yayoi Period can be divided into four periods: the first-, early-, middle-, and late-period pedestals. Among them, the middle-period pedestals were grouped as the Nishiyama series, which is split into the Nishiyama and Uehara types, whereas the late-period pedestals are classified into three series: the Miyayama, Mukogimi, and Yatojiyama series.

The Mukogimi series was developed in the following order: the Yabe-Minamimukai, Nishie II, Nishie III, and Mukogimi types. Although the same types of special pedestals were excavated in different parts of the Kibi Region, the analysis of their clay indicates that they are unlikely to have been produced in and distributed from a specific site but likely to have been mode by producers moving one place to another within a specific area.

The special pedestals of Yabe-Minamimukai type (the oldest type of the Mukogimi series) and those of Yatojiyama type from the Yatojiyama series were unearthed only in the Ashimorigawa Area. The special pedestals of the Yatojiyama series are shaped in the same way of those of Mukogimi type and decorated with the pattern of Uehara type from the Nishiyama series, which indicates that this series may have been established after the Mukōgimi series. The Mukōgimi and Yatojiyama series are likely to have been created in the Ashimorigawa Area. On the other hand, the Miyayama series is considered to have been established in the eastern part of Soja Area because the special pedestals of Yanagitsubo and Miyayama types from the Miyayama series were only found there. Cylindrical haniwa sculptures are also considered to have been born in the Ashimorigawa Area because the cylindrical haniwa sculptures of the oldest type of the Totsuki series were excavated there and because they typologically originated from the special pedestals of Yatojiyama type.

Early- and middle-period special pedestals were found in the large mound burials of the Tatetsuki and the Koikui Shrine, respectively, both of which were located in the Ashimorigawa Area; however, in the late period, when special pedestals were divided into two series, large mound burials were no longer created. The last large mound burials were Yatojiyama Mound Burial in the Ashimorigawa Area and Miyayama Mound Burial in the east part of the Soja Area. The powerful clans that had used special pedestals as symbolic tools for ritual integration in Bicchu may have been split into two,

one moving to the east and the other to the west, before the Mukogimi and Miyayama series were established.

As strongly indicated by the fact that special pedestals of the last type of the Miyayama series and cylindrical haniwa sculptures of the early type of the Totsuki series were later erected on extra-large keyhole tombs, such as Hashihaka Tumulus and Nishitonozuka Tumulus in the Yamato Region, the culture of keyhole tombs was established integrating the symbols of the Kibi group and those who had worshipped it.

Key words: Late Yayoi Period, Bicchu, special pedestal, Mukogimi series, Miyayama series, Yatojiyama series